

東漢の學者

の最も古るものなり、歎と同時に揚雄あり、又經術に通ず、然れども、述作を以て却つて其名を成せり、後に略説するところあるべし。

東漢光武學を好む、故を以て名儒又少しとせず、河南の鄭衆、扶風の賈逵、皆その家學を承け、尤も毛詩、周禮、左傳に明かなり、逵の論著、百餘萬言、伏湛、伏黯兄弟は、伏勝の裔なり、齊詩に明かに、子孫數世、その家學を傳ふ、桓榮は、宿學を以て、明帝に經を授け、その子郁、章帝、和帝に教へ、郁の子焉、亦た安帝、順帝に教ふ、一家三世、相踵いて五帝の師たり、順桓の世、扶風の馬融、博洽を以て稱せられ、詩、書、易、三禮、論語、孝經等、皆注解あり、徒衆甚だ盛なり、涿郡の盧植、之に事へ、古今の學に通じ、性剛毅にして大節あり、靈帝の末、尚書となり、董卓に忤ふを以て免ず、北海の鄭玄、篤學にして諸經を究め、山東問ふに足るものなきを以て、西關に入り、融に従つて疑義を質す、辭して歸るに及び、融曰く、鄭生今去る、吾が道、東すと、玄、衆家の學を兼ね、注釋繁詳、兩漢の儒學、玄に至つて大成す、然れども、融、玄皆緣諱を信じ、問ま其説を採り、以て經義に附會するを以て、後儒之を疵とす、任城の何休、公羊の學を好み、公羊墨守、左氏膏肓、穀梁廢疾を作り、以て、二傳を難ず、玄、乃ち墨守を發し、膏肓を鍼し、廢疾を起す、休見て嘆じて曰く、玄、吾が室に入り、吾が矛を取り、以て、我を伐つかと、同時に江

南朝の學者

南の服虔あり、亦た休の説を駁し、左氏傳解を作る、魏の時、王肅、王弼、何晏ともに名あり、肅、善く買馬の學をなす、而かも、鄭説を好まず、異同を採會し、盡く諸經を注し、聖證論を著し、以て鄭玄を譏短す、玄の門人孫叔然、又之を駁す、世、鄭王を以て、並稱す、弼、易注を作り、晏、論語集解を作る、晋の杜預、史學に明かに、身、將帥の任に膺り、武功世を蓋ふ、吳を平ぐの後、思を經籍に潜まし、左傳集解を作る、南渡の後には、范甯、穀梁集解の作あり。

西晋の初、漢魏の遺儒あり、東晋に入りては、王弼の易、孔安國の古文、尚書、鄭玄の尚書、毛詩、周禮、禮記、論語、孝經、服虔、杜預の左傳、皆博士を置きしが、當時詞藻を尚び、玄言に耽りしを以て、經術盛ならず、南朝梁武、學を好みしを以て、その前後、問ま名あるものあり、齊の王儉、禮樂及び春秋に通じたるを以て、國子祭酒を領し、梁の皇侃は、論語義疏を作り、その他、崔伏、何嚴の徒あり、陳世の儒術は、梁の遺儒なり、然れども、南朝の經術は、終に北朝に及ばず。

北朝の學者

北朝經術の盛は、學校その他の關係ありと雖も、古しへ、鄭玄、暨皆北方の人なり

しこと與つて最も力あり。故を以て、亂離の日、名儒なほ多し。徐遵明は、儒宗として、博く諸經に通じ、山東に教授し、孝莊帝の時、亂に死せり。高弟李鉉、北齊の博士たり。經生多く、其門より出づ。熊安生、最も禮に習ふ。周の武帝、その名を聞いて、之を重んず。齊を滅するに及び、安生遽に門を掃はしむ。家人之を怪しむ。曰く、周帝儒を崇ぶ、必ず來つて我を見む、と。すてにして果して至り、遂に携へ歸り、命じて、五禮を議せしむ。徐氏の門、他に盧景裕、崔瑾、李周仁等あり。周隋の間、劉焯、劉炫あり、二劉と稱す。焯、財に吝、束脩を行はざるものは、未だ嘗て教授せず。炫、亦た貪鄙。隋の文帝、遺書を購求せしとき、炫書百餘卷を偽造し、賞を取つて去る。然れども、二人、聰明博覽、著述富贍、一代の大儒なり。隋に入れば、王通ひとり名あり、惜むべし、早く死す、而して、その學、亦た訓詁を事とせず、一家の言を成し、その說、迂なりと雖も、やゝ觀るべきものあり。

南北の經術、その盛衰、すてに同じからず。好尚亦た異なり。之を江左に見るに、書は孔傳、易は王弼注、三禮は鄭注、もしくは王肅注、春秋は左傳杜注、論語は何晏注、之を河洛に見るに、書易、三禮、論語、皆鄭氏を主とし、春秋三傳は、服虔、何休、范甯を用ひ、

南北經學の差

唯だ詩は、南北ともに鄭注に遵ふ。之を要するに、南學は簡にして、華、北學は深にして、燕、隋人、南北の學を併採し、書易、春秋は孔王杜氏を用ひ、詩、三禮、論語は皆鄭氏を用ふ。これより、書易の鄭注及び王肅、二何、服、范氏、皆微なり。

唐の經學

唐は九經を以て、學生に課す。禮記、左傳を大經となし、詩、周禮、儀禮を中經となし、書易、公羊、穀梁を小經となし、二經以上に通ずるものは、舉に應ずるを得せしめ、孝經、論語は皆兼ねて之に通せしむ。太宗の時、孔穎達、顏師古等に命じて、五經正義を撰せしめ、鄭、孔、王、杜を以て本となし、衆家の義疏を採り、増損して、之を廣む。詩書、左傳は、多く、二劉の疏に據り、禮記は、梁の皇侃及び熊安生の疏に據り、賈公彥、又周禮、儀禮の疏を作り、鄭學を發揮す。孝經、舊と孔、鄭二注あり、玄宗更に自ら注を作り、元行沖に命じて、之を疏せしむ。かくの如くして、漢儒の注、愈々繁冗、蕪雜となりしと雖も、太宗の意は、經說を一定せむとするに在りしこと、言を待たず、而して是れ實に訓詁の終局にして、自然の結果なり。故に唐の一代、儒を以て稱せらるゝもの少からずと雖も、その經說は、正義の範圍より出でず、特に大異說なし。惟だ李鼎、祚、易の集解を作り、鄭を宗として、王を排し、啖助、春秋を説き、三傳を宗とせず、その得失

を考へ、斷ずるに己の意を以てす、然れども、大旨公穀を主とす。趙匡陸質、その學を傳へ、質、遂に啖趙の説を纂して、春秋集傳を作れり。

漢唐の學、皆五經を主とし、論語之に次ぐ。大學、中庸の二書は、禮記中に收めて、別本となさず、而して、孟子の如き、甚だ重んぜられず。東漢たゞ趙岐の注あるのみ。唐に至りて、亦た學官に立てず、而して、韓愈ひとり之を推尊す。宋代の理學は、漢唐訓詁の繁瑣なる學風に反抗して起りしものにして、就中、その中堅たる二程の學は、孟子研究の上に成立す。然らば、愈や、實にその先聲として、不可なきなり。

經術を以て、唯一の學問となせし氣運は、全く獨立的思索を杜絶せしめき。漢唐の間、思索家、絶無といふに非ず。然れども、二流以下に止まり、淺薄なる素養を以て、無責任なる放論をなすもののみ。之を先秦時代に比すれば、晉に紗燈の烏鐘に於けるのみならず、淮南子の一書、これ漢初老莊盛行の紀念物なり。淮南王安、性辨達にして、善く文を屬し、又客を好み、蘇飛、李尚、左吳、田由、雷被、伍被、晉昌等八人及び諸儒、大山、小山の徒ともに、道德を講論し、仁義を總説して、この書を作る。その論、頗る

淮南子

董仲舒

揚雄

雜駁、然れども、その旨要とするところは、老莊の形而上學を主とし、子思の性論を以て、道德法則の心理的基礎を確立せしめむとするに在り。その規畫、惡しからざれども、概して淺薄、且つ時に矛盾あるは、争ふべからず。董仲舒の學説を觀るべきもの、春秋繁露あり。その説、天人合一、小宇宙の觀念を主持し、且つ愛と利とを均一にするところ、期せずして、墨子と冥契するところあり。儒家の説としては、未だ醇ならず。

次は揚雄、西漢の末造の大儒、否、寧ろ漢代を通じ、又漢唐を通じて、稀に觀るの大學者にして、而かも、多面的なりき。彼は哲學者たるの外、文人たり、賦家たり、兼ねて、言語學者たりき。その著太玄は、形而上學に關し、宇宙の本體を呼んで玄となし、之を老莊等、南方思想家の謂ゆる道と均一にし、且つ易に論じたる現象變化の法則を認許し、又別に現象進動の方式を案出せり。太玄八十一首、即ち是れなり。而して、法言は、之より推及して、實際的方面に關し、道德政治の法則を推斷し、性を以て、佗、侗、顯、蒙、善、惡、混、ざるものとし、之を以て、一個の小玄體と看做したり。要するに、淮南子と相並び、南方思想の調和を以て、主要とするものにして、取るべきもの、少しと

東漢の諸子者

せず。然れども、二書ともに、文字の奇奥險晦なる、尋常の學者、到底、その意義を探索し難きに苦み、世に行はれず、法言の卒章、又盛に王莽の功徳を稱す、君子之を病む。東漢の思索家に至りて、此等に比して、愈よ降り、桓譚の新論、王充の論衡、王符の潜夫論、仲長統の昌言、桓寬の鹽鐵論、荀悅の申鑑、徐幹の中論等あれども、皆取るに足らず。

葛洪

神仙説を唱へし葛洪、抱朴子の著あり。その前半は、老莊の遺意を發揮するものにして、やゝ觀るべきも、後半は仙藥調劑の法を述べ、不稽殊に甚し。これに繼いで關朗あり。洞極真經を傳ふ、自ら謂ふ、祖先以來秘藏するところ、はじめ讀めども、解する能はず、嵯峨山に入りて、統先生を訪ひ、その要旨に通ずるを得たり。と、然れども、自著に係るや、言を俟たず、その論、形而上學に接觸し、宇宙の本體を探究せしものなれども、淺陋ことに甚し。

關朗

六朝の間、儒釋道の三教、並存の結果、その調和に想及せしものあり。張融、顧歡、譚峭は、いづれかの二に就いて之を言ひ、王通は三教一致に論及せり。王通は、龍門の人、隋の文帝の末年、關に詣つて、太平十二策を獻ず。帝、用ふる能はずして、罷め歸り、

王通

韓愈

遂に河汾の間に教授す。弟子遠きより至るもの、甚だ衆く、累りに徵せども起たず。大業の末、家に卒す。門人私に諡して文中子といふ。その書十卷、門人輩、その師平生の嘉言懿行を叙説せしものなり。その學の根柢は、漢族特有の道德思想たる中の新意義を發明せしに在り。その言を以てすれば、中は、社會上變通主義の根柢にして、調和といひ、折衷といふもの、すべて、この上に成立す。三教一致、亦た之に本づく。故を以て、議論その者は、甚だ賞嘆を値せずと雖も、その精神は、後世に大影響を與ふべきものなり。文中子の書、語氣全く論語を摸す。後世之を譏るもの多し。

李翱

唐の思索家は、韓愈わづかに之に當つべし。然れども、彼は、時勢の必要上、儒教の維持者、振興者たるに過ぎず。その作るところの原道、原性師説等、數十篇、皆與行、闕深、孟軻揚雄と相表し、六經を佐佑すと稱せらるゝも、實は淺近なり。性論や、觀るべし。その徒、李翱、復性論三篇あり。佛教思想を以て、性情を解釋す、而して是れ、實に宋代理學の先聲なり。

活潑なる創思特見、すでに求むべからず、こゝに於て、文學は、すべて敘事的方面

司馬遷

其他の史家

班固

に成功せり。その首に居るものは、歴史にして班馬の二人、漢代を重からしむ。武帝の時、司馬談、太史令の官に在り、左傳國語戰國策楚漢春秋等によりて、太古より漢に至るまで、歴代の興廢盛衰を記せむとせしも、未だ成らずして卒す。その子遷、父の遺志を續いて、遂に十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳を作れり。是を史記となす。本紀は、帝王の事跡を叙し、世家は諸侯の沿革を記し、列傳は英雄豪傑偉人藝士の行事を述べ、表は史上の事蹟を一目瞭然たらしめ、書は禮樂刑政天文食貨に關することを詳述す。蓋し、この體例は、司馬氏の創設に係り、後世正史の矩準とするところなり。司馬氏の史學に於ける、その功や偉なり、且つその文辭矯健にして、才華縱橫策に文學上より觀るも、亦た頗る價值あり。後漢の初、班彪、史記の後傳六十五篇を作りしが、その子固、更に高祖より王莽に至るまでの事跡を集めて、十二本紀、八表、十志、七十列傳を作れり。是を漢書となす。後世史記と並稱すれども、事實精確に近きを長とするのみ、文辭の驚雄は、るかに及ばず。

班馬の後、史を修むるもの多し。司馬彪の續漢書、華嶠の後漢書、袁宏の後漢紀、及び孫盛の魏春秋、王隱の蜀紀、張勃の吳錄、習鑿齒の漢晉春秋等ありしも、過半は亡

陳壽

范曄

唐の史家

びて傳らず、唯だ陳壽の三國志及び范曄の後漢書のみ世間に稱せらる。但しその體例は、班馬の舊に仍る。

陳壽は、元と蜀の人、晋に仕へて著作郎となり、魏吳蜀の史を合編す。是を三國志といふ。併せて六十五篇、叙事簡潔にして、冗漫ならず、文章純潔にして、浮靡ならず、當時すでに良史の才ありと稱せらる。後南朝の時に及びて、宋の裴松之、群書を輯覽して、その補注をなせり。范曄は、宋人にして、文帝に仕へ、かつて學徒を召集し、群籍を參考し、後漢の光武より獻帝に至るまでの事跡を編述し、十紀八十列傳を作れり。然れども、諸志未だ成らずして、曄、誅せらる。後世續漢書の志類を取りて、之を補ふ。是を後漢書といふ。叙事文章、三國志に劣れり。その後、梁の沈約は、宋書を撰し、蕭子顯は、南齊書を撰し、北齊の魏收、後魏書を撰し、李百藥は、北齊書を撰し、令て前代の史を編せしめ、姚思廉は、梁書及び陳書を撰し、李百藥は、北齊書を撰し、令狐德棻は、岑文本、崔仁師、陳叔達とともに、周書を撰し、魏徵等は、隋書を撰し、房喬は、晉書を撰す。晉書は、實行を略し、浮華を獎め、正典を忽にして、小説を取るとの譏あり。隋書は、顔師古、孔穎達、傳記を撰し、于志寧、李淳風、章安仁、李延壽、令狐德棻、諸志を

撰したるが故に、最も完備なりと稱す。李延壽又宋梁齊陳及び後魏齊周諸史の煩蕪を憂へ、南史北史を撰す。修史家、すてに此の如く、史論家としては劉知幾あり。中宗玄宗に歴史す。著はすところ、史通あり。唐世には歴史天子の實録あり、韓愈の如きも、順宗實録を編著せり。これ後世正史の材料となりしものなり。五代の時、晋の劉昫、唐書を撰せり。

散文の廢頹

三代の時、太古を去ること遠からざるを以て、言語文章、未だ暢達する能はず。周末に至つて、文辭はじめて盛なり。論語の簡約、孟子の明暢、老子の深奥、莊子の變幻、左氏の典麗、國策の雄勁、孫子の精奇、韓非の峭深、屈原の悽愴、皆その妙を盡さざるなし。而して、四六の一體、すてに萌芽を此間に抽きしを見る。四六とは何ぞ、その語を四六にし、其辭を偶儷にし、その聲を諧協し、一に駢體といふもの、即ち是なり。劉勰の如きは、之を以て、人性自然の發出に係るとなし。陳繹曾の如きは、之を以て、必然的なる一種の美辭となす。然れども、秦漢以來、文士辭に習ひ、葩を揚げ、藻を振ひ、閎衍華麗、一代の風となりしに因り、律語は、遂に散文を犯し、文氣や、弱く、駢つて

八代文章の衰

古作家

四六文の横流を促進したり。

秦時李斯の文甚だ偉麗然れども、すてに暗流の源頭に立つるものなり。下つて、賈誼、相如、枚乘、鄒陽に至るまで、漢代の詞客文人、唯だ一の司馬遷を除いて、其文盡く辭賦の趣致を存す。賈誼は、晁錯、賈山とともに論策を以て名あり、故を以て、猶ほ古に近し。他は、すべて漸く甚しからむとす。揚雄之を悔む、その弊を矯むるに意あり、太玄法言、古經を摸擬し、措辭務めて艱奥を爲す。然れども、終に救ふ能はず。その文、亦た至れるものに非ず。班固の如き、命世の文豪と稱せらるゝも、猶ほ此弊あり。漢末の蔡邕、曠世の逸才を以て目せらるゝも、その文、華麗に過ぎ、強いて儷句を用ひたるの跡、徒に醜とすべく、魏晋以下、益す浮華に流れ、綺靡纖弱、觀るべきもの、甚だ寡し、謂ゆる八代の衰、即ち是れなり。

かくの如き四六瀾漫の間に在り、卓然獨立するもの、二三その人なきに非ず。諸葛亮は、千古の偉材、力を文藝に用ふるものに非ずと雖も、その前後出師の二表、簡嚴精切、六朝再び此文を見ず。杜預、陳壽、陶潛、又古文の脈を傳ふ。之に次いで、周主、宇文泰が、その臣蘇綽に命じ、書の大誥に倣うて、詔敕を作り、群臣を會し、文筆皆之に

依るべきを命じたるが如き、實に復古の唱首たり。然れども、四六は唐に入つて、猶ほ衰へず。王楊盧駱、謂ゆる四傑より以下、蘇頌、張九齡に至るまで、皆然り。陸贄の如き、勳業朝に顯はれ、固より翰墨の徒に非ず、而かも、その文多く、駢句を用ひ、俗賦に異ならず、唯だ真意篤摯、反覆曲暢、排偶の跡を見ず、かつて德宗の爲に詔誥を作るや、武夫悍卒に至るまで、皆感泣す。その論諫、切に時弊に中り、皆仁義に本づく、洵に經世の文、四六を以て卑視すべからず。

韓柳以下

唐の文章、復古の暗流は、はじめに陳子昂あり、次に張説あり、次に元結、獨孤、及蕭穎士、李華、梁肅あり、凡そ三變して、韓柳に至り、その績は、はじめて觀るべし。韓愈、宏才卓識を以て、力を古文に用ひ、百家を綜覈し、鎔して之を化し、陳を刈り、僞を剷し、粹然として一に正に出で、泥洋自ら肆にし、拘束するところなく、遂に八代の陋習を一洗し、唐の文章をして、蹤を周秦に接せしむ。當時愈に亞ぐものは、唯だ柳宗元のみ。宗元は、二王に與し、憲宗の怒に觸れ、因つて廢黜せらる。その永柳二州に居るや、自ら山水の間に放にし、澹心感鬱、一に之を文に寓す。愈、かつて之を評して曰く、雄深雅健、司馬遷に似たりと。韓柳二人、相並んで、世に稱せらる。而して、その文致、全く相

古文復興の氣運

異なれり。韓は縦横、柳は變化、一は大なるものにして、一は高さもの。前者は議論の奔放と、氣魄の雄大とを以て勝り、後者は叙述の精微と筆致の雋潔とを以て秀づ。愈の友に李觀あり、時に愈と上下せしも、惜いかな、早く死せしを以て、未だ樹立するに至らず。李翱、皇甫湜、愈に従つて、學び、翱はその謹嚴を得、湜はその奇崛を得たり。孫樵、又湜の法を傳へ、刻苦して奇を求む。然れども、皆韓柳に及ばず。以上の諸家、皆時を同うす。されど、古文の復興は、固より大事業にして、區々數人の手に因つて完成され得べきに非ず。之を以て、韓柳二人に遂げられたりと、思惟するは、猶ほ大早計といふべきのみ。殘唐五代を経て、宋に入り、迷夢未だ醒めず、滔々たる駢儷の文、尙ほ世の尊重を博す。然れども、柳開、穆脩、尹洙より、歐陽修に至りて、はじめて真正の復興を觀るべかりき。

辭賦の盛行

漢唐間の文學は、律語に在り。その初は賦、之に次ぐものは詩なり。漢代の賦に於けるや、物質的、凡俗的、遊戲的にして、先秦時代の活潑なる思想界に於て、その位地を占むべく、むしろ柔軟纖弱なりしが、元と是れ人間に於て、必然的、普遍的實在を

剛漢の賦家

有すべきものなるが故に、漢代太平の時運を待つて、始めて起發したるなり。賦は、元と南方の詩形にして、屈原の作るころ、實に其祖たりき。然れども、漢に入りては、其初二三輕佻なる文士の爲に誤られて、本來の意義を失ひ、やがて、邪徑に彷徨し、不幸にも完全なる發達を爲さざりき。漢に於ては、騷と賦とを區別せり。騷は、屈原の舊に依り、主觀的感懷を述ふるを主とせしも、賦は客觀的にして、一に王侯貴人の娛樂に供し、浮誇の辭、縟麗の文たるに過ぎず。而して、騷は、極めて少く、賦ひとり盛行せり。これより先、諸子の書を著はすや、各言を立て、道を傳へむと欲するのみ。文を爲るに意なく、而かも、文自ら美なり。西漢より以下は、文辭を貴び、その雄麗を極めしに由り、文遂に學者の一藝となり、名賢必ずしも皆文を能くせず、文士必ずしも皆道に達せず。道と文と、岐れて二となれり。漢魏六朝の文士、皆賦を作り、その傍、詩文に及ぶ。而して、司馬相如、實にその冠冕なり。之を稱するものは、人間より來らず。其れ神化して至れるかといふに至る。之と同時に、枚阜、東方朔等あり、劉向、揚雄の徒、之に次ぐ。然れども、西漢の豪奢、濶達なるに反し、東漢以下の民風は、やゝ弱に失するを以て、賦亦た其影響を受け、班固、張衡、蔡邕等、骨力すべて前人に及ば

詩

建安體

ず。魏晉に至りては、規模愈よ小なれども、家國興亡の感は、その音節をして自ら悲涼ならしめ、一種纏綿の情致、間々見るべきものあり。更に轉じて南朝に入れば、賦は篇幅の大なるを以て、之に従事するもの少く、詩ひとり行はれき。

詩の起るは、武帝前後に在り、當時の貴族文學たりし賦に對し、平民文學として發展し、北詩南賦の衷を折し、五言の新體を主とし、七言亦た次いで、出で、皆體形の整齊を旨とし、樂章即ち謂ゆる樂府は、長短錯落、以て體となせり。有名なる古詩十九首と郊祀歌十九章とは、實にその權輿なり。然れども、當時専門の詩人あらず、文もしくは賦に従事するもの、時に之に及ぶのみ。魏の武帝、才、文武を兼ね、善く詩賦を爲り、その子曹植、才藻英發、筆を落せば、章を爲し、卓爾不群、なほ人倫の周孔あり、鱗介の龍鳳あり、音樂の琴笙あり、女工の黼黻あるが如しと稱す。同時に孔融、陳琳、王粲、徐幹、阮瑀、應瑒、劉楨等あり、世に鄴下の七子と稱し、その時、漢末建安の前後に在るを以て、その體を稱して建安體といふ。

魏晉代興の際、竹林中の阮籍、嵇康、尤も詩名あり、籍の詠懷、八十二首、源を離騷に

兩晋の詩家

發し、資くるに小雅怨俳じて、亂れざるの旨を以てす、詠ずるところ、皆司馬氏篡奪の陰謀と魏の明帝の庸愚暗弱之を啓きしを傷むに在り、西晋に入りては、傅玄の外に、張華、張載、張協、陸機、陸雲、潘岳、潘尼、左思あり、之を三張二陸兩潘一左といふ、諸家の作、措辭漸く綺靡、氣格愈よ下り、建安の風、すてに求むべからず、唯だ英華を煥發し、齊澤を塗飾するのみ、左思ひとり高く、劉琨、郭璞、之と並び、或は東晋三詩傑の稱あり、その後、玄風亦た詩に及び、又浮誕虛玄となる、こゝに於て、陶潛出づ、その作、冲澹深遠、古今田園詩人の宗を以て目せらる、謝靈運、又詞才あり、ともに自然を撰すを以て、陶謝並び稱す、その作、極めて工麗、而かも氣格却つて及ばず、顏延之、鮑明遠、之と時を同うし、やゝ後れて、謝朓あり、意銳にして才弱、しかも一代の名家たるを失はず。

齊梁の詩家

梁の武帝、博學能文、著述數百卷、昭明太子、及び簡文帝、元帝皆學を好み、詞藻に富む、古來帝王父子、才學を以て稱せらるゝもの、曹魏、蕭梁を最となす、梁朝文士多し、沈約、庾信、最も著はる、約は、宋齊に歷事し、梁武に勸めて、齊祚を移し、位、宰輔に至る、江淹、任昉、范雲、詩名之と相若く、庾信、梁の元帝の爲に、西魏に聘し、遂に長安に留つ

四聲の分科

て、魏及び後周に事ふ、周の明帝、武帝、皆文藝を嗜み、之を遇すること厚く、信の文章、又一變して、蒼涼蕭瑟となる、陳の作家は、陰鏗、徐陵、張正見、江總にして、梁の餘風を傳へ、綺縵殊に甚し、隋の煬帝、楊素、又詩を作る。

古しへは、詩律太だ寛、韻脚の字と雖も、假借あり、音に反切なく、平仄皆通用す、而して、佛教の傳來とともに、西域及び悉曇の語學、輸入せられ、晋の時はじめて、反切の學起れり、反切とは、兩字の音を約して、一字の音を顯すなり、又南朝に亘りて、文章にも、聲律を尙ぶに至りしを以て、音韻を論ずること、嚴にして、はじめて、四聲の別あり、謂ゆる平上去入、即ち是れなり、普遍に沈約はじめて之を創めしと稱すれども、晋の張涼、すでに四聲韻林を著し、且つ約ほ同時の周顒、劉善經、夏侯詠、王斌、皆著あれば、斷じて誤れるものなり、約、又八病の説を唱ふ。

文辭すべて對偶を喜び、且つ聲律を論ずること嚴、その詩に於けるや、遂に律體を生じ、絶句又従つて出づ、その源流、すでに六朝の末に在り、律絶、之を近體といひ、以て古體と分つ、唐初なほ六朝の餘に沿ひ、皆纖弱の習を脱せず、然れども、歴代の天子、詩を好み、且つ後には、之を以て、科擧の士を取るに至りしが、故に、俄然として、

沈宋の律詩

盛運に向へり。高宗の時、王勃、楊炯、盧照鄰、駱賓王、ともに名あり、四傑と稱せらる。則天の時、沈佺期、宋之問、二張に附くを以て進む、之間尤も行なし、二人詩を善くし、沈庾の餘風を帯び、益す雕鏤を加へ、音律諧協、屬對精鍊、律の體、こゝに成る。陳子昂亦た則天に媚事す、然れども、其詩は時俗に染まらず、高雅冲澹、建安に超え、文亦た疏樸にして古に近し。

李杜

玄宗の時、張九齡、張說、皆一代の名臣を以て、詩を賦し、文彩風流、一時に冠絶す。この時、國家昇平、文藝熾昌、詩人家に名づくるもの、勝へて數ふべからず。而して、李杜二人、實に其最たり。李白、逸才あり、豪放飲を嗜み、飄然として、超世の心あり、かつて長安に至る、學士賀知章、その作を見て、嘆じて曰く、子は謫仙人なり、と。之を玄宗に薦め、翰林に供奉せしむ。白なほ日に市に酔ひ、之に頃くして、辭して去り、四方に浮遊せしが、肅宗の時、罪を得て、夜郎に流され、赦に會うて、釋るゝを得、江南に客死す。杜甫、少にして貧、進士を擧げられて、第せず、長安に困む。玄宗その賦を見て、之を奇とし、集賢院に待制たらしむ。祿山の亂に會し、賊の得るところとなり、逃れて、肅宗に謁し、右拾遺に拜せしが、尋いて官を棄て、秦州に寓し、樵採自ら給し、幾もなく

韓白

して、劍南に流落し、その帥嚴武の參謀となり、武の卒するや、江湖に客遊し、衡山の陽に死す。甫、曠放自ら檢せず、好んで大事を談ず、而かも、高くして切ならず、數ば寇亂に當り、節を挺して、汗なく、歌詩を爲り、時を傷み、情、君を離れず、人、その忠を憐む。李杜の作、備偉跌宕、彫琢の工を假らず、その才、同じからずと雖も、古風近體、皆その妙に至る。こゝに於て、唐詩、蔚然として、大に興り、遂に後世の典型となる。

李杜と殆んど相敵するものを王維となす。その詩、興會を主とし、自ら別様の趣あり。その他、王昌齡、高適、岑參、李頎、常建、皆傳ふべし。次いで劉長卿あり、而して後、錢起、韓翃、司空曙等、謂ゆる大曆十才子の徒あり。唐の詩、こゝに一弛し、洪響すてに滅びて、纖音ひとり存す。之を翻倒して、中興の盛をなせしものを韓白二人となす。韓愈は、古文の復興者たることも、詩壇の革新者なりき。その詩、杜甫が奇險の處を推擴し、風骨峻峭を極む。白居易は、杜甫の雄渾蒼勁を變じて、流麗安詳となす。その詩、大に世に行はれ、遠く高麗、日本に及ぶ。韓門の詩弟子、賈島、孟郊の寒瘦、李賀、盧仝の怪詭、張籍、王建の平麗あり。元稹、居易と、堦、苑相和す、而して、其失は、白、俗、元、輕の體を免れず。

唐末の詩家

意象すてに盡きて、修辭はじめ盛なり。李商隱は、杜甫を學びて、わづかに典麗博大の處を得たれども、その特色は、艶靡綺麗に在り。温庭筠、之と上下し、世に新聲と稱す。杜牧の詩、豪にして、艶氣概あり、人小杜と號し、以て杜甫に別つ、然れども、家數未だ大ならず。その後、許渾、劉滄あり、鄭谷あり、羅隱、司空圖、章莊、杜荀鶴等あり。韓偓の香奩は、實に唐詩の煞尾なり。なほ當時、佛教の盛行に關し、方外の詩人ありしを忘るべからず。その最も特色なるものを、寒山子となす。その作、繩すに詩格を以てすべからざるも、時態を嘲罵し、流俗を驚駭する處、最も觀るに足る。

詞の發展

詩經より以下、漢魏に至るまで、詩の體形、多端なりと雖も、要するに、唯だ二、句格の整と不整と是れのみ。その音律を論じて、謂ゆる近體を生ずるや、前者は律絶となり、後者は詞となれり。詞は唐の中葉以後、はじめて其芽を抽きたり。李白、張志和、些作ありしは、未だ論ずるに足らずとするも、白居易、温庭筠、章莊等に至りては、新調の創製、愈よ多く、五代の間、馮延巳の如き、南唐李後主の如き、特に之を以て稱せられ、宋に至りて、愈よ滋衍し、後一轉して曲となり、遂に元の雜劇傳奇を孕むに至れり。

小説の萌芽

周の時、稗官あり、太師が民間の歌謠を采りしと同じく、街談巷説を采るを以て、其職となす。而して、道教の發達は、神仙譚の簇生を促しぬ。但し其書今存するもの少く、問ま之あるも、僞撰の嫌あり。この種の神仙譚と相並び、人間の情事を描き、正史以外に立ち、これを世に傳ふるを主とせしもの、二三時に之あり。雜事秘辛、飛燕外傳の類、即ち是れなり。ともに漢人の遺著にして、小説の萌芽なり。六朝の間、しばらく絶えしも、唐に至りては、再び盛にして、一代の才人藝士、之を作りしもの、少からず。游仙窟の如き、會真記の如き、最も名あるものにして、その他、唐代叢書の類に聚めしもの、僕を易ふるも盡さず。その結構單純なれども、いづれも、元代戯曲の粉本となりしものなり。

漢唐間文學の概観

之を一概して、漢唐間は、思索的方面に於て、頗る缺如するところありと雖も、純文學は、こゝに少くとも、形式上、大開展をなし、今後なほ愈よ多様多變なるべき趨勢を促したりき。

地動儀

科學の發達は、到底之を支那人に望むべからず。醫學の如きも、絶えて進歩なく、唯だこゝに記述を値するは、天文曆法の沿革のみ。西漢には、唐都李尋あり、東漢には、蘇伯朗雅光あり、ともに天文を以て名あり、蔡邕、離周、皆書あり、而して、張衡は、渾天儀を製し、次いで、侯風地動儀を造れり。この器は、精銅を以て鑄成し、員經八尺、合蓋隆起、形、酒樽に似たり、飾るに篆文山龜鳥獸の形を以てし、中に鄰柱あり、傍行八道、闢を施し、機を發し、外に八龍あり、並に銅丸を銜み、下に蟾蜍あり、口を張つて、之を承く。その牙機巧制、皆隠れて樽中に在り。覆蓋周密、際なく、もし地の動くあれば、樽振ひ、龍機發して、丸を吐き、蟾蜍之を銜み、振聲激揚、伺ふもの、之に依つて覺知す。一龍機を發すと雖も、七首動かず、その方面を尋ねれば、震の在るところを知り、之を驗するに事を以てす、合契神の如し、書典記するところより、未だ之あらざるなり、即ち一種の地震計なり。これより先、西漢の時、大章車あり、路を往く間に、里數を知る。天文曆法には、直接の關係なけれども、便を以て此に附記す。

曆法の沿革

秦の世、建亥の月を歲首となし、且つ月名を改めず、十月は年の始にして、九月は年の終なり。漢初なほ之に仍りしも、武帝の時、太初曆を作り、夏正によりて正月を

歲首としたり。後成帝の時、三統曆を作り、平帝の時、四分曆を作り、靈帝の時、乾象曆を作り、凡そ四變す。三國の時、吳蜀は漢曆によりて夏正を用ひたりしが、魏は正朔を改めて、建丑の月を正月となせり。之に次いで、東晋の時、虞喜、歲差を論ぜり。蓋し古來の曆法にては、三歲一閏、十七年に七閏、日月星辰の運行に出入なく、同一となるを、一章と稱せしが、なほ些少の差あり、數年の後、冬至に日の在るところ、同じならず、これ即ち歲差なり。虞喜之を算して、五十年、一度を差ふとなす。然れども、宋の何承天は、百年にして、一度を差ふものとなし、隋の劉焯は、七十五年にして、一度を差ふとなす。その眞は、知るべからず。唐の時、李淳風、曆法を以て名あり、更革するところ少からず。

印刷術

李斯の小篆、程邈の隸書に次いで、漢代、楷行草、諸體の創製あり、字を作ること、甚だ簡易となり、筆墨紙、又世に行はる。然れども、印刷の術は、未だし。隋の文帝、開寶十三年十二月、敕して、廢像遺經、悉く彫板す。これ典籍に見えたる印書の權輿なり。然れども、唐の一代を通じて、なほ汎く行はれず。五代の時、唐の明宗、太子賓客馬縉に命じ、詳勘九經官に充て、諸選人中に於て寫し、匠に附して彫刻し、漢の高祖の乾祐

中馮道はじめて周禮儀禮公羊穀梁の四經を鑿し、周の太祖の末、尙書左丞田敏、印板五經を進めしことあり、その他私人にして開板せしもの、間々消息を傳ふ、印書の術、こゝに於て、やゝ觀るべく、後百年を経、宋の中葉に至りて、正に其盛を極め、その技、愈よ精にして、古今の群籍、盡く上木せざるなきに至れり。

第二百二十八章 宗教

佛教の傳來、その流布の狀勢は、便に隨つて、數ば之を述べしことあり、こゝには、唐代諸外教の沿革を先とし、次いで佛教の概略、道教の起伏及び兩教の衝突に及びむ。

太宗英明の主を戴きたる唐初の世は、漢族の極盛時代にして、東洋史の局面は、殆んど空前絶後の大開展をなせり、曩に煬帝功を喜び、大を好み、西域を綏撫し、河西の諸郡、夙に東方交市の要地となり、西域四十餘國の商賈、相往來し、遠方の珍異、至らざるなし、次いで、唐の興るや、太宗の雄略、その功を成し、中央亞細亞、天山南路の交通、愈よ頻繁となれり、この時に方り、歐西に於ては、羅馬帝國、漸く其威を失ひ

唐代の外國交通

その天性、貨殖厚利の智に富める猶太人は、ひとり當時の全世界の商權を壟斷し、西は阿非利加の北岸、歐羅巴の南岸、東は印度支那に通じ、或は呼羅珊より、天山南路を経て、陸路より長安に入り、或は紅海に浮び、印度洋の洪濤に駕して、南海即ち今の福建地方に至れり、かくの如く、歐人の東洋に通ぜし同時に、支那人も亦た海外貿易の利益あるを知り、夙に之に従事せり、佛教東漸して、印度の諸邦、來り通ずるや、支那人は大に世界知識を益すの機會を得て、海運の業、漸く盛に、殊に隋唐の際、内地は、喪亂紛擾に悩むと雖も、巧慧なる南方の商賈、盡は、毫も之と相關せず、その船舶は、遠く赤道直下、貿易風の圈帶に出沒し、時に或は波斯に赴き、或は紅海灣頭の阿丁に達せしことすらあり、西曆五世紀の前半、使を南朝の宋に遣せし錫蘭、即ち獅子國は、その地理上、東西黃白兩人種、交易の大市場となり、世界諸國の商賈、この地に來集し、或は其地に寄住するものあり、之に次いで、唐初西方に回教徒の勃興するあり、悉く地中海岸の地を略して、大帝國を建設し、サラセン民族の勢力、正にその極點に達し、當時の商權、全く其手中に歸せり、こゝに於てか、印度河西の良港を占領し、波斯、猶太の諸民族とともに、益す海上の互市を擴張し、東方の物産

諸外教の輸入

を歐西に輸送せむが爲に、南海より來りて支那國民と貿易し、武后の治世、廣杭諸州には、大食國人の寄寓するもの頗る多く、安史亂後に及びては、提舉市舶を置き、海關稅を徵收して政府の財源となすに至れり。東西の交通、遂に其盛を極むるや、諸種の宗教は、相次いで、東方亞細亞に流傳するの機會を得たり。

かつて數ば論じたる如く、支那に於ては、儼然たる眞宗教の創始なく、根本的一様の形式に則りたる回顧退嬰の精神と、其上に建設されたる教義とは、もとより人心自然の傾向に背馳し、六朝の際、非常不幸なる境遇に沈淪したる人心の危機を救濟するに對して、寸功を認めず。故を以て、外教は、その機會を得る毎に、容易に輸入せられ、その勢力を逞うし、常に、多少の歸依者を得たり。佛教すてに然り、祆教また然り、摩尼教また然り、耶蘇教また然り、回々教また然り。蓋し是等の諸宗教は、相互の間、徑庭ありとするも、均しく、確然たる形體を備へて、支那固有の道教の淺薄に比すべからざればなり。而して、その來るや、實に六朝の間に在り、唐に至りて、愈よ其勢を激成せり。

耶蘇教流布の起原

東方傳道の沿革

支那羅馬、東西二大帝國の交通は、かつて、前に考察を経たり。こゝに、ナザレの聖者、神の子、耶蘇基督の生れたるは、前漢哀帝建安三年に在り、羅馬の勢を得るや、その教は、漸次四方に傳播せり、而して、當初非常の虐待と迫害とを被りしを以て、その信徒は、故國より亡げて、西は太西洋岸、東は印度地方に至るまで、各地に離散して、一層その弘布を迅速ならしめたり。後漢より晋に至るまで、羅馬の交通、史上に顯然たるも、耶蘇教の支那に入りたるや、否やに至りては、考據なく、散佚せる史料は、終に吾人に教ふるところなきなり。

はじめ、羅馬の東鄙に、教主キリストリウスといふものあり、新義を唱道して、衆僧の詰責するところとなり、遠謫して死せり。その徒、堅く師説を守り、竟にキリストリアンの一派となり、その東漸して波斯に入るや、之を信奉するもの多く、波斯王フエロダスに至りて、遂に定めて國教となし、教主をセルスキアに置き、化を東方に敷きたり。その支那に入りしも、實にその前後に在るべし。然れども、這般の事項は、支那に於て毫も資すべきものなきが故に、予輩は、翻つて之を歐西に存するものに求めざるべからず。かのウキリヤムソンが、その著、中國總論に記するところ、簡

なれども、頗る其要を得たるが如し。曰く、支那最始の耶蘇教傳道の消息を傳ふるものは、常に之を七世紀に於けるキリストリアン派の功績に歸す。實に口碑や憑據し難く、加ふるに、この東方帝國に關する教寺の記録は、ニアリアスの考覈せし如く、支離せる注意に本づきて、甚だ價值あるものに非ずと雖も、讚美の歌聲が、支那印度の域内に湧起せし時期は、使徒時代の後、年所を経ること甚だ多からざるものと斷定して不可なきが如し。若し夫れ、セント、トーマスを以て、拓開の首功を全うしたるものとなすの傳説の如きは、マリアリア教派の間に流布せし教書類纂中に在るを以ての故に、信ずるに足らざるや、辯を俟たず、唯だモスハイムの論ぜしところ、耶蘇教の支那蒙古に廣布したる時や、蓋し遠きのみ、而して是れ、トーマスの力に非ずとするも、古しへの傳道師に依つて、支那に輸達せしことあるの證左は、從來學者の拾蒐せしもの、亦た頗る多く、固より信ずべきなりといへるもの中れりといふべし。現に三世紀の頃、アルノビウスは、印度波斯支那に於ける布教の規畫に就いて語りしところあり、降つて、西曆五百五十年に至り、はじめて蠶卵を齎らしてコンスタンチノーブルに歸りしキリストリアン派の一耶僧は、久しく

支那に在りしものといへり。然れども、是れ必ずしも、布教の爲に彼地に赴きし破天荒のものにも非ざるべし。當時耶蘇教傳道の成功せし範圍は、只だ推測に任ずべきのみ。唯だ夫れ、かくの如き暗黒なる古昔の悠遠なる歲月の中にありて、かくも屢ば光輝の閃射するものある以上は、その根本たるもの、頗る赫灼たらずむばあらず。キリストリアン派のはじめて支那に入りし時期の如き、亦た確然測算するを得ず。而して、その五百五年を下らざることは、明かなり。何となれば、エベセサスソビエンシスの謂ふところ、カゾリヤス、サリバザチヤは、支那及びサマルカンドの兩教區を創設し、之をアチウス、シラスの兩僧に傳ふとあり、而して、シラスは、五百五年より五百二十年に至るまで、キリストリアン派の教長たりしもの、アケウスは、四百十五年に於て、セリユーキアの大僧正たりしものなればなり。凡そ支那教區に關する事項は、アムローの印行せしシラスの宗務文書中に散見し、着手の次序によりて印度の後に在りと。

こゝに謂ゆる五百五年は、支那に於て梁の武帝天監五年なり。而して、耶蘇教が、その初、波斯を経て傳來せしこと、又明かなり。波斯には、古しへより、次に述ぶるソ

ロアステリズムの一教あり、當時相並んで行はれしが如く、六朝の間、西僧の至りしもの、極めて衆かりしを見れば、ネストリアン派の宣教師と波斯ソロアステリズムの穆護とが、多少その中に混じり、各布教をなせしこと、推測と雖も、謬らざるに庶幾からむか。これ前説を確定するものにして、兼ねて兩教略ぼ同時に同處より來りしを以て、後世之を混同するに至りし所以を證するものなり。

景教の傳來

耶蘇教が隠々地に支那帝國に浸染せしは、固より然るべし。而して、その公然入り來りしは、實に唐の太宗貞觀九年に在りとす。これ亦た前に述べしネストリアンの一派にして、大秦の僧阿羅本アロハブ、經像を持して長安に至り、之を闕下に獻じたるを以て嚆矢となす。阿羅本の京に入るや、太宗は特に宰臣房玄齡をして、西郊に惣仗し、賓客の禮を以て、之を遇し、次いで、内殿に於て、經を翻譯せしめ、且つ自らこれに問ひ、遂に其教を受けたり。こゝに於て、貞觀十二年秋七月、詔して曰く、道に常名なく、聖に常體なし、方に従つて教を設け、密に群生を濟ふ、大秦國の僧阿羅本、遠く經像を將て來つて上京に獻ず。その教旨を詳にするに、玄妙無爲、その元宗を觀るに、生成要を立て、詞に繁説なく、理に筌忘あり、物を濟ひ、人を利す、宜しく天下に行

信 歷代帝王の崇

ふべしと、因つて、有司に命じ、長安の義寧坊に、大秦寺一所を造らしめ、その僧二十一人を度せり。ネストリアン派、呼んで景教といふ。その命名の來由は、景教碑中に「眞常の道、妙にして名づけ難く、功用昭章、強いて景教と章す」とあるを見て知るべし。又有司に命じ、帝の寫眞をも、併せて寺壁に轉摸せしめたり。

高宗の時に至りては、諸州に於て、各景寺を置き、仍つて阿羅本を尊んで鎮國大法主となし、景僧を厚遇せしを以て、次第に國中に廣まり、武后の聖曆年中、時に佛教徒と相容れず、多少の騷擾を來たせしことありしが、僧首羅含ワカ及び大德トク及烈リョウの盡瘁によりて、全く頽廢せず、幸に絶紐を維ぎたり。降つて、玄宗に及びては、最も之を獎勵し、寧國等五王をして、親ら大秦寺に臨み、壇場を立てしめしを以て、法棟し、ばらく撓んで再び崇く、道石時に傾いて復た正となれり。天寶の初、大將軍高力士をして、高祖より睿宗に至るまで、五聖の寫眞を送り、寺中に安置せしめ、絹百疋を賜はりしことあり。その三年、大秦の僧倍和ヘイワ、遠く來り、羅含ワカ、普論フロン等十七人に詔して、ともに興慶宮に於て、功德を修せしめ、又寺院に御筆の額を賜へり。肅宗は、靈武等五郡に於て、重ねて景寺を建てしめ、代宗に至りては、耶蘇降誕の辰ごとくに、天香を

賜ひ、御饌を分ち、以て之を表彰せり。德宗に至りては、特に事蹟傳ふべきものなけれども、常に尊崇保護を怠らず、かくの如く、歴代の帝王尊信、淺からざるを以て、上の爲すところ、下争つて之に赴き、群臣又之を奉ずるものあり、汾陽王郭子儀の如き、その尤なるものなり。

以上記するところを見れば、耶僧は皆大秦より來りしものなり。大秦はもと羅馬及びその帝國の版圖を汎稱せしものなれども、こゝに謂ふところは、特にシリアに限れり。唐書西域傳に、拂菻は古しへの大秦なり、西海の上に居り、一に海西國といふ、京師を去ること四萬里、西北は突厥可薩部に通じ、西は海に瀕し、遲散城あり、東南波斯に接すとあり、おもふに、シリアは羅馬に滅ぼされて其地に入り、且つ東鄙たるを以て直に大秦と呼び、長く之を傳へたるものならむ。景教碑中、大秦の風土を記して曰く、南は珊瑚の海を統べ、北は衆寶の山を極め、西は仙境花林を望み、東は長風弱水に接す、その土、火浣布、返魂香、明月珠、夜光璧を出し、俗、寇盜なく、人樂康あり、法、景に非ずむば行はれず、主、德に非ざれば立たず、土、宇廣濶、人物昌明と、此に由つて之を觀れば、愈よそのシリアたるを知るべく、況んや、同碑中のシリア

シリア

文字は、確然として動かすべからざる好證左たるに於てをや。

支那に傳道せむが爲に來りし耶僧は、大抵シリアの産なり。抑も耶教の傳道は、かのニケイア會議の後、一層その歩武を進め、波斯印度に盛行せしを以て、耶教は疑もなく、その初、波斯を経て來りしなり。然れども、又印度よりせるものあり、伊斯坦の如き、即ち是れなり。景教碑に曰く、僧伊斯和にして、惠を好み、道を聞いて、行を勤め、遠く王舍の城より、聿に中國に來る、術は三代に高く、藝は十全に博く、始めて節を丹庭に策し、及び名を玉帳に策すと、蓋し王舍の城は、ラヂャグリハにして、印度ガンヂス河畔の一市なり。

伊斯は、郭子儀と結托して、大に力を布教に盡したり。景教碑中、大施主を以て之を稱す。その來るや、肅宗の初年にして、安史の亂未だ平かならず、子儀正に戎を朔方に總ぶ、帝命じて、之に従はしめ、軍旅の間、耳目の功をなし、祿賜を受くるも、家に積まず、寺院を修め、法堂を廣くし、又大に慈善事業をなし、後遂に官爵を受けて、金紫光祿大夫同朔方節度副使試殿中監賜紫袿袿に至る。

かくの如くして、景教は、愈よ盛行に趁きしを以て、德宗の建中二年、大秦寺の僧

景教流行碑

景淨等、與に謀つて一碑を立てたり。その高さ四尺四寸五分、廣さ三尺五寸、前面上部に十字架形を鏤刻し、その下に三列九行の彫字あり、大秦景教流行中國碑といふ、雄勁華麗なる長篇の碑文、凡そ一千七百八十字、今試にその文意を概括すれば、

- (一) 耶蘇教義を總叙略説し、比喩的に深意を拔萃表顯し、
 - (二) 阿羅本より伊斯に至るまで、景僧の東來、帝室尊信の事を記し、
 - (三) 八字對句を以て前章の總意を重修せり、
- なほ碑面の左右及び下部には、シリヤ文字を以て、當時布教に従事せし景僧の姓名を附刻せり。

この碑は、建立の後、幾もなくして、戰亂の爲に、地中に埋没し、長く世に知られず、千二百二十餘年を経過したる後、明の崇禎年間に至り、長安府崇仁寺の域内に於て、發掘されしものにして、實に東方耶教傳道に關する最古の遺物なり。唯だ夫れ、歲月の久しき、土中に在りて、摩滅腐蝕して、沒意難解、人ごとに讀法を異にし、眞意を定むるに苦しむもの數所あり。然れども、晚近の支那學者チャールス、レンツの考證挿入せしものを見れば、大體を知るに易々たるのみ。凡そ、支那の史籍、新舊兩唐

その考證

書より以下、雜史小説に至るまで、絶えて景教に關する一事項を載せず、頼ひに此碑の存するありて、はじめて唐代景教の狀況を知るを得。而して、予が前に述べしところ、その多半は、この碑文を其儘に書き下せしに外ならざるなり。或は又この碑銘文格の唐代に似ざるを疑ひ、却けて後代の偽作ならむといふものあり、然れども、パウシアは、銳意研究して、自ら之を翻譯し、且つ註釋を加へ、景教碑銘確證の一書を刊行し、その決して偽贋に非ざることを論證せり。

すでに、耶教傳來の大略を叙述したれば、こゝに便を以て、之と混同されたる祆教及び同時に或る地方に行はれし摩尼教回々教に就いて附説するところあるべし。

祆教は、即ち波斯のゾロアステリズムにして、天日を拜するが故に、此名あり。その傳來、最も古るきが如しと雖も、諸説紛々として一定せず。普通には、晋世すでに之ありといふ、杜預が春秋釋例を修せしは、その吳に克つて江陵より襄陽に還りしときにして、晋の武帝太康元年に當る。その春秋僖公の傳、次睢の社といふに注

祆教

して、唯水汴を受け、東陳留梁譙沛彭城縣を経て、泗に入る。その水次、祆神あり、東夷皆社として之を祠る。蓋し人を殺して祭に用ふ、といひ、姚寬は、これ即ち火祆の神その來る、蓋し久しといひ、諸家之を信じ、或は石勒の時、祆祠を建てたりといふものありと附記す。然れども、左傳次唯の社の注は、諸本或は妖に作り、或は祆に作り、陸德明の音義、その音を載せざるを見れば、祆てふ異字に非ざるが如し。之に次いで、石勒の時、祠を立てたりといふも、確證なく、漠然として捕捉すべからず。若し夫れ、直に之を祆となし、春秋の時に於てすでに祆教の傳來ありといはむとするに至りては、むしろ噴飯すべきのみ。その祆字の明かに見えたるは、梁の顧野王の玉篇にして、呵憐切、祆神と注し、後には、徐鉉又說文に増入せり。然らば、その晋世に在りしは、信ずべからず。北齊の後主、好んで鬼神を褻し、躬を以て、自ら胡天に事へ、後周西域を招徠せむとし、亦た胡天を拜し、その俗、胡俗に違ふ、皆祆神といへり。蓋し大食國即ち亞刺比亞の勃興するや、回々教を流布し、東波斯を占略して、中央亞細亞に及びしにより、ゾロアトル教徒の東に奔るもの、多かりしは、勢自ら然るところ、唐に至りて、その盛行を見るに至れり。貞觀五年、即ち耶僧阿羅本の來朝に

に先つこと四年、傳法穆護阿祿祆教を以て關に詣つて、聞奏す。因つて勅して、長安崇化坊に祆寺を立てしめ、大秦寺と號し、又波斯寺と名づく。寧遠坊、又祆神廟あり。武德四年には、祆正を置き之を掌らしむ。而して、宋の時、東京城北に尙ほ其廟の存するものありしといふ。蓋し祆教は、景教に比して、その傳來や、早く、根株すてに堅かりしが故に、然るか、而して、景教と同じく、寺に大秦の稱あるは、等しく波斯より傳はり、且つ支那人の由來外國知識に乏しきや、この二國を劃然區別せざりし等の事ありて、然るならむ。但し當時は、二教決して混同せられず。祆教は、その正祝等皆胡人を以て、之に充て、西域を平ぐるに及びては、祠部歲に二たび、磧西諸州の火祆を祀るの規定にして、唐民自ら祈祭するを禁ぜしといふに反して、景教は、歷代の聖君名相、皆崇奉して、措かず、その輕重、固より同日の談に非ざるを知了すべし。

摩尼教

これに次いで、聊か留意すべきは、摩尼教なり。この教は、實に耶蘇教より分出したるものにして、もと波斯マニといふもの、自ら神の命を受けて、基督の業を紹繼

すと稱し、耶蘇教とその國固有の拜火教、即ち祆教とを混じ、又雜ふるに佛教を以てしたる一種の調和的教義なり。或は傳へて、マニかつて難を避けて、印度及び支那を歴巡せしといへども、固より詳かならず。則天武氏の時、その僧、二崇經を持して、入唐す。その徒、嫁娶せず、互に不語を持し、病むも藥を服せず、死せば裸葬す、これをマニの戒法といふ。開元二十年、敕あり、摩尼法が假りに佛教を冒し、邪見衆を惑はすを以て、嚴に禁斷を加へしむ。唯だ西胡等、自ら其法を行ふものは、罪を科せず。回紇もとより此教を崇び、肅宗その援を借り、安史の大亂を戡定したりし後、その徒、内地に入るもの多く、代宗に至り、京に在るものに命じ、摩尼寺を建てしめ、額を賜うて、大雲光明といふ。回紇請うて、荆揚洪越の諸州に於て、同じく大雲光明寺を置き、憲宗の時、亦た摩尼寺を新創せり。こゝに於て、西土の宗教、支那に入りしもの凡そ三種、皆時を同うせしを以て、時に之を呼んで三夷寺といふ。

こゝに回教の始祖マホメットの生れしは、隋の世に在り。高宗の頃には、亞刺比亞人、擊つて波斯を併せ、疆土日に廣く、西はすてに太西洋岸に及び、東は將に葱嶺

に接せむとせり。唐にては、之を呼んで大食國といへり。前に述べたる如く、大食は、屢ば唐と交通し、時に或は積路よりせしも、多くは海程より來り、且つ其民賈を善くしたるを以て、唐は爲に廣杭諸州を以て、互市場となし、回教も亦た往々にして、唐に入れり。然れども、主として、南陔の地に限られ、未だ京師に及ばず。かくの如くして、次に詳述する武宗排佛の時にも、幸にして、打撃の厄に遭はず、且つ僻地の政令、自ら寛なるを以て、諸外教の殘留せしもの、或は遷徙して、こゝに寄居せしが如し。後に僖宗の乾符四年、流賊杭州を陥れしことあり、亞刺比亞の商アブサイド、東洋記行を著し、その實視せし杭州埠頭、漁浦屠掠の事を叙するや、回々、耶蘇猶太波斯諸教徒、死者凡そ十二萬人と注せり。亦た以て西人の多く、此地に集まりしと、僻陬外教の長く盛なりしとを察知すべきなり。

諸種の外教相繼いで東漸せしと雖も、佛教はその由來最も古く、且つ魏晉以後の人心に投合したるを以て、その根柢、牢固にして、容易に抜くべからず、その勢力、毫も削殺せらるることなかりき。こゝに前に數ば散見せし事實を概括し、佛教盛

佛敎の沿革

行の状況に就いて、略述するところなからず。

三國の時魏の曹植、好んで佛典を讀み、朱仕行は、經を于闐に求め、康僧吳に至るや、大帝甚だ之を敬し、佛敎吳魏に行はれ、江の南北、均しく鐘磬の聲を聞く。次いで、印度の僧法護、洛に至りて、戒律を譯し、魏人はじめて戒を受けて剃髮す。晋初、敦煌の僧法護、西域に遊び、大に梵經を得、長安に至りて、傳譯し、佛敎東流、これより盛なり。而して後、新豐の沙門智猛は、華子城より經律を得來り、烏菟の佛圖澄は、石勒に重用せられ、道安之に事へて、又甚だ重ぜられしが、石虎の死後、中原紛擾するや、その徒を率ゐて南遊し、南襄陽に駐まり、弟子を諸方に分遣し、敎を晋境に布けり。秦主苻堅の襄陽に克つや、安を得て、大に喜び、因つて慧遠とともに長安に入り、秦僧佛念と乘經を譯出す。道安、寂後二十年、龜茲の僧鳩摩羅什、長安に至りて、經論を譯し、又罽賓の僧迦提は、東來譯經に従事し、支法領は、華嚴經を金陵に譯せり。後秦の僧法顯、長安より天竺に遊び、三十餘國を經、大に經律を得、遂に航して、獅子國即ち今の錫蘭島に至り、商船に附して東還し、風に遭うて、漂ひ、遂に山東の青州に至る。その行を記して佛國記といふ。是を支那僧入竺の破天荒となす。之に次いで智猛

あり。涼州の智嚴、寶雲、罽賓に至りて、禪法を學び、禪師覺賢を要請し、ともに秦京に至る。雲還つて亦た覺賢を師し、後ともに晋に入る。宋時、嚴海に汎び、再び印度に至つて死す。北燕の曇摩竭は、南印度より航して廣州に至る。凡そ支那より天竺に遊ぶもの、流沙を渡り、葱嶺を越え、その路、極めて險惡、海路よりすれば、風濤の難愈よ、甚しきものあり。こゝに於て、その伴侶、多く途にして斃る。法顯、智猛の行くと、各十餘人、還るに及びて、顯はたゞ一人、猛は其徒と、惟だ二人、竭の行くと、各二十五人、たゞ五人、還るを得たり。この時、佛徒、惇信篤志、法を求むるに勇にして、艱險を憚らず、而して、西僧の來つて、敎を宣ぶるもの、亦た愈よ多く、沙磧洋海、來往、繼るが如し。就中鳩摩羅什、才德最も著はれ、その門下に道生、僧肇、道融、僧獻、道恒、僧影、惠觀、惠嚴の八傑あり、曇無讖、曇摩羅懺、佛陀耶舍、曇摩羅提、曇摩耶舍等、皆大小乘の經律を譯したり。晋宋の間、顯嚴雲禰及び諸西僧等、南方の化を慕うて、多く江左に居り、宣譯の盛、兩晋に亞ぎ、當時の名士謝靈運、顏延之、何尚之の如き、皆文を爲つて、佛理を宣揚し、宋の文帝、佛を崇び、名海外に播き、印度以東、佛を奉ずるの國、頻りに使を遣して朝貢し、帝の功德を頌せり。この後、諸帝皆三寶を敬し、梁武に至りて、益す甚し。か

南北朝の佛教

くの如く、佛法の流布、東方に遍かりしが故に、從來専行せし小乗の外、大乘の弘通亦た盛なり。五胡中原に入り、國を立て、地を争ひ、而かも殘虐殺伐の事蹟、比較的に少かりしもの、佛教の效果即ち然りといふ。

南北朝の初、迦濕彌羅の朮那跋摩、宋に來りて、はじめ、戒壇を作り、齊には法獻法暢あり。梁の武帝、大通元年、南印度の菩提達磨、海を航して、廣州に至る。武帝召し見、問うて曰く、朕多く寺を造り、經を寫し、僧を度す、何の功德かある。達磨曰く、並に功德なし。淨智妙明、體自ら空寂、是の如きの功德、世に於て求むべきに非ず。と。帝悟らず。達磨江を渡つて、魏に適き、嵩山に止まり、壁觀九年にして歿す。達磨の教、經論に依らず、直に人心を指して云ふ、見性以て成佛すべし。と。弟子慧可、能く其道を傳ふ。達磨袈裟を授け、以て法信となす。武帝の佞佛、今古殆んど其匹を絶ち、華林園に經典を集むること、五千四百卷、捨身三度、その終や、臺城に餓死す。而して、北朝に在りては、魏の太武、深く道教を信じて、佛を排せしが、文成位を嗣いて、之を復し、獻文は少にして位を遜り、寺を北苑に建て、數百僧と禪定を習ひ、孝文儒を好むと雖も、亦た敢て佛を排せず。宣武に至りては、崇信最も深く、胡僧至るもの三千人、道希、最

周隋の佛教

も譯經を以て著はる。孝明の時、胡太后、又佛を信じ、寺を建て、人を遣して、經を印度に求めしむ。その後、國亂るゝや、民賦役を避くるに因り、僧尼となるもの、二百萬人、寺三萬餘區あり。宣武、孝明、恰も梁武と同時、南北ともに佛法の盛を極む。

周の武帝、儒を好み、詔して、道釋二教を禁じ、悉く經像を毀ち、沙門道士をして、並に還俗せしめしが、未だ其勢を挫くに及ばず。隋の文帝、周の政を乘るに及び、復た二教を行ひ、禪を受くるに及び、詔して、民の出家を聽るし、仍つて、口を計り、錢を出し、經像を營造せしむ。

こゝに於て、時俗風靡し、民間の佛書、儒經より多きこと、數十倍はじめ、東魏の慧文、一心三觀を唱へ、之を慧思に授く、慧思之を智顛に傳へ、顛因つて其義を廣め、五時四教を立て、往いて天台山に居る。陳の宣帝、始豐縣を削いて、其費に供し、僕射徐陵等、之に師事す。陳亡びて、天下一に歸せし後、煬帝、顛を重んじ、號を智者大師と賜ひ、爲に國清寺を建つ。これより國清、江南の巨刹となる。

唐の天命を受くるや、太史令傅奕、深く佛を惡み、上書して、之を除かむを請ふ。高祖百官に詔して、雜議せしむ。僕射蕭瑀、以爲へらく、奕、聖人に非ず、當に其罪を治む

佛教の極盛時

べしと高祖僧道多く戒を守らざるを以て、有司に詔して、之を沙汰せしむ。太宗に至りて、その禁を停め、但だ私度を禁じ、度に應ずるの數を定む。貞觀の初、洛州の僧玄奘、聰睿篤學、五印度を歴遊し、戒賢の門に入り、經論六百五十部を得て、還る。太宗之を重んじ、かつて留めて禁中に居らしめ、晝は陪御して談論し、夜分、院に就いて翻譯し、太宗親ら三藏聖教の序を作り、高宗は爲に述聖記を撰し、又大慈恩寺を建て、新獲の梵經及び瑞像舍利等を奉安し、奘等をして、之に居らしむ。而して奘の没するや、敕して、斂するに金棺銀槨を以てす。奘、經論を譯する、凡そ一千三百餘卷、又その行を叙して、西域記を撰し、中央亞細亞及び印度諸國の地理風俗を述ぶること最も詳なり。則天武氏、好んで大像を營し、中宗多く寺を造り、僧を度し、耗費限なく、玄宗は敕して、僧尼三歲一たび籍を造らしめ、奪いて、祠部をして、度牒を給せしむ。この間、義淨三藏は、玄奘の跡を學び、求法の爲に印度に至り、印度の僧善無畏三藏、金剛智三藏、不空三藏の三大士、相踵いて、入朝し、惠日三藏、又印度に至る。彼此僧侶の來往、なほ頻々として、已まず。文宗の時には、寺院四萬、僧尼七十萬ありしといふ。之を以て、諸種外教に較ぶれば、太陽の爛火に對する如く、殆んど其比を爲す能

はざるなり。

八宗の分派

佛教橫流すてに久しく、すてに年所を經たる後、自ら見解の差異を生じ、其中多數の分派を見るに至れり。魏晉の間、佛徒講學、未だ精しからず、其道渾朴、宗派の稱なく、唯だ律の源、夙に此間に開きしを見るのみ。而して、鳩摩羅什の關に入るや、三論の學、はじめて盛に、その後、諸宗踵いて興り、唐に至りて、十餘家あり。その大なるもの、凡そ八、是を八宗といひ、後、皆之を我邦に傳ふ。試に傳通の概略を述ぶれば、

(一)三論宗 中論、百論、十二門論を以て、據となすが故に、此名あり。鳩摩羅什は、はじめて之を唱へ、姚秦に行はれしが、秦の亡ぶや、その徒多く、江南に遷り、六傳して、隋の吉藏に至り、疏解詳備と稱す。高麗の僧慧灌、吉藏に學び、後ち我が邦に入る。時は推古天皇三十三年なり。

(二)法相宗 一に唯識宗と名づく。唯識論一部を以て、全教の據となすものなり。玄奘は、はじめて之を印度の戒賢に受け、以て窺基に授く。我が孝德、齊明の間、道昭、智通、智達の輩、入唐し、玄奘に師事し、還つて其學を傳ふ。

(三)律宗 支那最古の教派にして、法時に初まり、覺名、覺賢二師に備はる。後魏の

律

法相

三論

華嚴

法聰深く其義を究め、數傳して、唐の法礪道宣に至り、はじめて一宗となる。我が孝謙天皇の時、唐僧鑑真來朝し、禪宣の疏を傳へ、その教を弘敷す。

(四)華嚴宗 は華嚴經を以て據となす。覺賢はじめ此經を譯出し、隋時法順、その學を發揮し、二傳して法藏に至り、宗義愈よ明かなり。則天號を賜うて、賢首戒師といふ。新羅の僧審祥、その道を傳へて、我が邦に來り、良辨受けて之を弘む。

天台

(五)天台宗 慧文はじめて之を唱へ、智顛之を廣む。その居るところに因つて、宗名を擲む。顛より六傳して、湛然に至り、詳に疏釋を製し、以て道邃に授く。我が桓武帝の時、最澄入唐して、之に謁し、その奥旨を傳へて歸る。

真言

(六)真言宗 一に密教といふ。開元中、印度の僧善無畏、金剛智、唐に至りて之を傳へ、不空之に繼ぎ、慧果その後を承く。最澄と同時に、空海、慧果に従ひ、之を我邦に傳ふ。

禪

(七)禪宗 即ち達磨の唱へしところ、五傳して、慧能に至りて、徒衆滋す繁く、分れて、青原南嶽の二派となり、唐末に至り、南嶽復た分れて、潯仰臨濟の二派となり、青原分れて、曹洞法眼雲門の三派となり、臨濟曹洞はじめて本邦に傳ふ。

淨土

(八)淨土宗 道安の弟子慧遠、襄陽より東して、廬山に至り、僧俗百餘人と蓮社を結んで、念佛し、儒生世を厭ふもの頗る其社に入り、陶潛謝靈運亦た之と遊ぶ。これ此宗の緒を開きしものなり。後に道希、淨土論を譯し、曇鸞之が注を作り、唐の道綽、善導等、淨業を勸諭し、諸宗の高僧、參して之を修む。故を以て、師傳の系なく、號して高宗となす。本邦淨土の祖師、亦た唐に入つて、教を受けしものなし。

以上八宗の外、涅槃地論攝論俱舍の諸派を并せて、世に十三宗といふ。知るを要す。佛教の備はれる、唐より盛なるものなきを。

さばれ、佛教は要するに、外國の宗教のみ、自尊排他の念慮に滿ちたる漢族は、到底之に嫌らず、故を以て、不完全なる道教は、この間に立ちて、毫も衰へざるのみならず、翻つて、數ば諸教を壓倒したることあり。

かつて前に述べたる如く、道教は、荆楚山澤思想と燕齊海濱思想との化學的抱合に依つて成立せしものなり。秦皇漢武之に溺れ、次いで迷信的傾向は、漢魏六朝を通じ、張陵となり、張角となり、六朝の間、君子は清談を事とし、小人は符祝禱祠を喜び、愈よ之を鼓煽せり。東晉の初、葛洪といふものあり、羅浮山に入り、仙術を得た

道教の沿革

道教の崇尙

り、書を著して、其理を推明す。是を抱朴子となす。降つて齊の時、陶弘景、句容に隠れ、道業を修め、真誥を作り、梁の武帝又、厚く之を遇せり。而して、北朝に於ては、寇謙之、後魏の太武に崇信せられ、遂に之をして、排佛の舉を爲さしめり。これより後、道教大に江北に行はれ、齊、隋符咒金丹玉漿の法紛紛競起、每帝即位、必ず符籙を受け、以て故事となし、天尊及び諸天仙の像を刻して、供養す。周の武帝、道士衛元嵩を信じ、釋教を廢せむと欲せしも、僧徒之を争ひしに因り、遂に并せて二教を罷む。

唐の姓は李氏なれども、その前、開てゆるものなし。高祖の時、晋州の妖人、自ら言ふ、羊角山に於て、老君に見ゆ、曰く、吾が爲に唐の天子に語れ、吾は而の祖なりと、詔して、其地に就いて、廟を建てしむ。秦漢以來、帝王仙薬を求むる、史に書を絶たず、而して、唐最も甚しとなす。道教の影響、大なりといふべし。太宗の時、王玄策、印度に使し、一方士を得て、還るや、帝命じて、延年の薬を造らしめ、年を歷て成る。帝之を服し、暴疾を致して、崩す。高醫手を東ぬ。議者、方士を誅せむと欲せしも、笑を外國に取るを恐れて、果さず。一代の英主にして、身を以て劇薬を試み、終に此に至る。生を食るの心、乃ち然りと雖も、むしろ怪しむべきに非ずや。況んや、他の庸主に於てをや。

佛道二教の衝突

高宗の時、亳州に幸して、老子の廟に謁し、尊號を上つて、太上玄元皇帝といひ、王公以下に詔して、皆道德經を習はしめ、明經舉人をして、策試せしめ、道士を以て、宗正寺に隸し、班諸王の次に在り。はじめ、東晋の道士王符、老子化胡經を作り、西土亦た老子の教化を被るといふ。佛徒之を怒り、歷世論争す。こゝに至り、高宗、僧道を集めて、その眞偽を論ぜしむ。僧法明、之を折き、道流能く應ずるものなし。勅して、化胡を搜聚して、之を焼かしむ。則天の時、僧慧澄、又化胡經を毀たむを請ふ。入學士、狀を繕し、以て偽に非ずとなす。中宗位に復し、僧道互に謗り、徒に教祖を辱むるを以て、詔して、この偽經を除かしむ。然れども、中宗、道教を崇信すること、固より篤く、諸州に詔して、各觀所を治めしめ、方士にして、秘書監、國子祭酒となるものあり。睿宗は、二公主を以て、女冠となす。これより、皇女道に入るものあり。玄宗最も、道教を重んじ、制して、士庶家ごとに、道德經一本を藏せしめ、親ら注疏を作り、兩京諸州各、玄元廟を置き、道法に依つて、齋醮し、兼ねて、崇玄學生を置き、道德經及び、莊文列等、道家の書を習ひ、以て貢舉に應ぜしめ、兩京の崇文館學士、大學士を置き、莊文列、庚桑諸子を追號して、皆真人となし、その書を尊んで、真經となし、道德經を以て、群經の首

趙歸真

に列せしめ、諸郡開元觀、金銅を以て、等身の天尊像を鑄、五岳及び靈山仙跡、並に糞採を禁じ、祠宇を立て、多く道士を度し、以て祭祀を修め、玄元を尊んで、大聖祖となし、聖祖の前に、文宣王の像を立て、四真人と左右に列侍せしむ。この時、公卿吏民、争つて符瑞神異の事を奏し、宰相李林甫、宅を捨て、觀となし、以て、聖壽を奉じ、帝大に悦ぶ。肅代、德宗の間、道教の盛、稍や佛に遜ると雖も、その皇家の正教たるを以て、名位常に佛の上に在り。憲宗の如きは、柳泌の藥を服し、日に燥渴を加へ、數ば暴怒せしに由つて、弒に遇ひ、穆宗は、泌を以て京兆府に附し、杖死せしめしに拘らず、又趙歸眞の説を聞き、その藥を餌し、疾作つて崩じ、敬宗は、歸眞を逐ひしが、劉從政を寵し、使を發して、藥を江南に採らしめしことあり。武宗は、歸眞等八十一人を召還し、遂に道釋二教の衝突より、排佛の舉に及びしこと、猶ほ魏の太武の如し。

會昌元年、武宗法錄を趙歸眞に受く、拾遺王哲等、之を切諫し、坐して貶せらる。その三年、望仙觀を禁中に築く。帝すては、道を好み、因つて僧尼の天下を耗盡するを惡み、之を去らむと欲す。趙歸眞等、復た之を勸め、乃ち先づ山野の招提蘭若を毀つ。會昌五年七月、敕して、上都東都に各二寺を存し、每寺僧三十人を留め、天下の節鎮

武宗の排佛

各一寺を留め、寺は三等に分ち、僧を留むる差あり、餘の僧及び尼は、並に勸して、俗に歸らしめ、皆期を立て、毀撤し、仍つて御史を遣し、道を分つて、之を督せしめ、財貨田産、皆官に没入し、寺材は以て、公廩驛舍を葺き、銅像鐘磬は以て錢を鑄る。凡そ天下毀つところの寺、四千六百餘區、招提蘭若、四萬餘區、歸俗の僧尼二十六萬五百、食田數千萬頃、奴婢十五萬人を收む。この迫害は、獨り佛教のみに止らず、大秦、摩尼の兩寺は、廢罷せられ、京城の女摩尼十人は皆死し、回紇は諸道に流されて、大半死亡し、景祿兩教の僧二千餘人、並に放つて還俗せしめらる。かくの如くして、東亞の大帝國は、一時無宗教の状態を現出せり。

佛教の復興

然れども、人心の趨向は、一片の政令を以て容易に禁遏すべからず。後わづかに三年、武宗崩じて、宣宗位に即くや、大中元年閏月、敕して廢寺を復し、僧尼の弊を并せて、又前の如くなれり。然れども、諸種の外教は、特に重視せられざるを以て、再興に及ばず、その儘、廢絶に任かせ、萌芽すてに摘まれ、未だ抽かざるに、早く枯死せり。故を以て、唐史氏之を記せず、その遺亡されしこと、久しかりき。回教の南疆に於け

る幸に害を蒙らざりしが五代戰亂の後亦均しく幽味の中に消えて全く遺影を留めざるに至れり。

耶蘇教の始末

耶蘇教の支那本土に於けるやかくの如しと雖も東亞に於てはなほ幾分その跡を留むるものなきに非ず排佛の前一年教長ケンシモーはサブチャルチエサスを蒙古及び支那に派遣し多年その地に在りメリヂスといふ者と交代して歸らむとするや中道にして死せしといふこの一事蒙古地方に於て早く既に景教の輸達されしを知るに足るべく降つて十三世紀に及びては有名なる旅行家マルコポーロの手抄によりてキリストリアン派の宣教師が蒙古地方に多数にして且つ大に尊信されしを信ぜしむその後諸派の耶教この地に入りしものその人に乏しからず然れども支那内地には些少の影響をも及ぼさざりき。

若し夫れ耶教再度の輸達に至りては歐洲近世史の劈頭喜望峯新航路發見の後に在り當時殖民政略盛に行はれ歐人の東洋に來航するもの日に多きを加へ以太利葡萄牙和蘭の如き明代の中頃より支那と交通せり而して神宗の萬曆年間羅馬人利瑪竇の來朝布教を始としその後宣教師の入朝するもの相繼ぎ歴代

の帝王亦た多大の好意を表し之に因つて今日の支那諸派の耶教日に盛ならむとすこゝに唐代の盛行は豫め之を前示するものにして一片の景教碑は布教傳道の上に於て少からず便宜なる口實を與ふるものなるや必せり。

第二百二十九章 技藝

音樂

音樂秦の古制を敗壞するや三代の樂悉く亡び禮失し呂律その調を得ずわづかに隣人の樂と五行の舞とあり大率周制に準じて之を爲す漢の始めて興るや魯人制氏世々大樂官に在りたゞ能くその鑿鎗鼓舞を記すといふ高祖の時叔孫通宗廟の樂を制し且つ昭容樂禮容樂を作れり武帝の時に至りては李延年を以て協律都尉となし趙代の音を總べ齊楚の氣を撮りひろく天下の詩を采つて夜誦し司馬相如等數人を擧げて歌詞を作り八音の調に合せ郊祀歌十九章を作れり張翥の西域に使用するや胡樂二曲を傳へ延年胡曲に因つて新聲二十八解を作れり後漢の明帝樂を分つて大予樂周頌雅樂黃門鼓吹樂短簫饒歌樂の四種となせり大予樂は郊廟上陵等の祭に用ひ周頌雅樂は群雍六宗社稷の祭に用ひ黃門

鼓吹樂は天子群臣を宴する時に用ひ、短簫、鏡歌樂は軍陳に用ふ。その後、海内騷亂、この道甚だ衰へ、曹操の荊州を破るや、杜襲を得て、雅樂を制定せむことを命ず。襲、鄧靜、尹商、馮肅の徒とともに、經籍を考へ、故事を采りて、古樂に復す。故に魏には正世樂、迎靈樂、武頌樂、昭業樂及び昭武樂、鳳翔舞、靈應舞、舜頌舞、大昭舞、大武舞等あり。西晋又之に仍りしが、荀勗新律を以て、樂調を整へ、正徳大悦の二舞を作れり。劉石の亂、江左に偏安するや、朝廷樂官を欠き、後、冉魏亡びしとき、鄴中の樂人、晋に來り、復た大樂を備ふるを得しも、未だ全に至らず。苻秦燕を滅し、鄴中の樂人、悉く秦に入る。苻堅亡ぶや、樂工楊最、江南に入り、晋の樂はじめて至し。南朝の齊に至り、郊廟の雅樂を定め、南郊には、群臣の出入に肅威の樂を奏し、牲の出入に引牲の樂を奏し、籩豆毛血を薦むるに佳薦の樂を奏し、神を迎奏するに昭夏の樂を奏する等の別あり。北郊明堂の祭、亦大同小異なり。梁の武帝、博覽古に習ひ、自ら雅樂を制し、頗る觀るべきものありしといふ。北朝は、後魏の太武、夏を平けて、古樂を得、又西涼を平けて、伶人樂官を得しが、古樂は傳らず。宣武に至り、劉芳樂を司り、之に明かなるものを集めて、肆習し、大に是非を參取せり。然れども、その後、専ら胡樂を愛し、屈

茨、琵琶、五絃箏、篳篥、胡笛、胡鼓、銅鼓の類を以て、胡舞をなし、琴瑟の如き、殆んど行はれず。北齊祖珽之を改めて、魏晋の舊に復し、北周の時には、六代の樂を作り、雅音を定めて、郊廟の樂となし、鐘律その宜しきを得たりといふ。隋の文帝、陳を平ぐるに及び、宋齊の舊樂と陳の樂人とを得、雅樂漸く備はる。煬帝淫曲を好み、且つ胡樂を併用し、その制、大に壞る。唐、海内を平定するに及て、祖孝孫、南北を斟酌し、古音を參取して、大唐の雅樂を作り、之を太宗に獻ず。凡そ十二和樂にして、四十八曲と稱す。又別に文武の舞あり。文は七徳舞と稱し、武は九功舞と稱し、ともに太宗の功を傳へむが爲に作る。他に上元舞あり、之を并せて三大舞といふ。その樂器は、鐘、磬、祝、敔、晋鼓、節鼓、琴、瑟、箏、筑、竿、篳篥、篳篥、埙、簫、于、鏡、鐸の類なり。玄宗の時、龍池樂、聖壽樂、少破陣樂、光聖樂等を作り、樂部を分つて、立部伎、坐部伎となし、又左右教坊を置いて、俗樂を教ふ。教坊の生員二千人、太常の樂工は萬餘戸、その盛、想ひ見るべし。安史の亂、後音樂頗る衰へしも、宣帝の時、なほ太常の樂工五千餘戸、教坊一千五百餘人ありと稱す。五代の時、多少の沿革ありと雖も、大略唐の舊に依り、漢は十二和を改めて、十二成となし、周は更に十二順となし、世宗の時、王朴に命じて、雅樂を更定せしむ。

書

(書畫)東洋に於ては、書畫相並んで、文房の清玩に供し、美術として、相下らざるの觀あり。蓋し漢字は、元と象形より進歩せしものにして、その根柢に於ては、居然たる繪畫の一種なればなり。漢魏の間、杜度、崔瑗、張伯英、羅叔景、趙元、嗣鍾繇、ともに善書の稱あり。蔡邕は、飛白八分を以て名あり。晋に至りては、書法益す觀るべし。衛瓘は、伯英の筋を得、索靖は、伯英の肉を得たりと稱せらる。王羲之は、導の從子、篆隸、真行草及び飛白の諸體、一として可ならざるなく、百家の能を總べ、衆體の妙を備ふといふ、まことに、古今獨歩の名家なり。その子獻之、亦た名あり。南朝を通じて、能手亦た少からず。唐に至りては、選舉に筆法の造美を要せしを以て、書に巧なるもの頻々として出づ。虞世南は、秀逸の趣あり、褚遂良は、蕭散の風あり、歐陽詢は、妍緊にして小楷を善くす。就中、張旭は、意態縱橫、草聖の稱あり。その王侯の前に酣醉し、帽を脱して、頂を露すの時、毫を揮つて紙に落せば、雲烟の如くなれりしといふ。その喜怒哀樂、すべて之を書に發す、變化測るべからず。顔真卿は、遒勁秀拔にして、端嚴方正、その人と爲りに類し、ひとり真書に適す。柳公權は、之より出てたれども、別に

漢代の畫

機軸を出して、一家を成すと稱す。

繪畫の漢に於ける、史上に見ゆるもの、頗る多し。宣帝の時、功臣十一人を麒麟閣に畫き、光武の時、功臣二十八人を凌烟閣に畫き、又元帝の時、毛延壽、陳敞、劉白、龔寬、陽望、樊育をして、後宮の美人を畫かしめしといふが如き、その盛を知るべく、又人物畫を主としたるを、臆想すべし。その畫、今存するもの、少けれども、武梁石室の畫、孝堂山石室の畫の如き、その一斑を窺ひ見るべし。

六朝以後の畫家

晋より以下、名手頗る多く、ひとり人物のみならず、又自然に及ぶ。顧愷之の如き、謝安之を稱して、蒼生あつてより未だ之あらずとなせり。戴逵、又名あり。その子起及び頤、之を承く。宋には、陸探微あり、その畫六法を備へ、人物山水草木、一として能くせざるなく、包前孕後、古今獨歩の稱あり。その子綏及び宏、肅、又之を承く。梁に張僧繇あり、畫くところの釋氏は、顧陸と並び馳せ、山水は、素練の上に於て、青綠重色を以て、先づ峰巒泉石を圖し、後に邱壑巖巖を染出す。その始に、筆墨を以て、鈎せざるを沒骨皴といひ、實にその創始に係る。その子善果、備童、亦た畫を善くし、佳致多きを以て知らる。稍寶鈞、又僧繇に次ぐ。

唐の諸名家

唐に入りては、閻立本あり、太宗の眞容を寫し、十八學士凌烟功臣を圖せり。玄宗の時、李思訓あり、唐の宗室にして、弟姪五人、皆丹青に妙、山水樹石、筆格遒勁、草木鳥獸、皆その態を極め、金碧輝映、一家の法をなし、後人著匠、徃々之を宗とす。これを北宗の祖となす。その子昭道、又山水を畫き、小李將軍と稱せらる。時に吳道玄といふものあり、亦た畫を善くす。かつて、大國殿に於て、嘉陵江を寫し、一日にして、畢る。思訓亦た命を受けて、之を寫し、數月を経て、わづかに成る。玄宗見て、嘆じて曰く、思訓數月の功、道子一日の跡、皆その妙を極む。と同時に王維あり、詩に巧にして、又畫を善くす。常に破墨の山水を畫くに、雲峰石色、皆その眞に迫る。これを南宗の祖となす。後張璪、その法を傳ふ。その他、曹霸、陳闕、韓幹、盧鴻、鄭虔、韓滉、王洽、周昉、戴嵩、范長壽あり。五代には、荆浩あり、亂を避けて、太行の浩谷に隠れ、浩谷子と號し、山水樹石を畫いて、自ら娛む。かつて曰く、吳道子の畫、筆あつて墨なし、項容墨あつて筆なし、吾二子の長ずるところを採つて、自ら一家の體を成さむ。と、その抱負、想ふべし。その門に關同あり、筆愈よ簡にして、氣愈よ壯、景愈よ少くして、意愈よ長く、詩中の淵明、琴中の賀若と相若くと稱す。黃筌、又寫生を以て名あり、諸家の善を資つて、妙に臻

らざるなし、と稱す。その他、徐熙、周文矩、李昇、趙幹等、又皆名あり、之を要するに、繪畫は、漢後はじめて觀るべく、その後、漸次進歩せし所以、佛教傳來の結果、印度の文化を輸入し、或は直に之を學びしにも、因るべけれども、その遺世的思想の影響、更に大なるものあるを忘るべからず。南宗の如きは、尙ぶところ、主として禪寂の韵致に在り、愈よ其然るを知るべきなり。

彫刻

(彫刻) 彫刻の技も、秦漢以後、多少の進歩をなせり。秦の始皇が天下を巡遊し、到る處、石に刻して、德を頌し、漢代征伐、北夷を逐ふや、石を立て、功を勅したるが如き、石刻の頗る行はれたるを知るべく、順帝の時、古文篆隸の三體を以て、五經を石に刻したるが如きは、大にその進歩をトすべく、謂ゆる石經、即ち是れなり。又當時天子諸子大夫の印璽に文字を刻せしを見れば、印刻の技、亦た觀るべし。若し塑像に至りては、佛教の流布とともに、其技はじめて盛なり。然れども、名工は比較的、少く、遂に繪畫と相若く、能はざるが如し。

建築

(建築戰國の末、建築の術、大に進歩せしが、その後、秦の阿房宮の如きは、殊に壯麗を極めたるものなり。史の記するところに據りて、之を見れば、東西五百步、南北五十丈、上には萬人を坐せしむべく、下には五丈の旗を建つべく、周馳して閣道を爲り、殿下より直に南山に抵り、南山の巔を表して、闕となし、複道を爲つて、阿房より渭を渡り、之を咸陽に屬し、以て天極閣道に象り、漢を絶つて、營室に抵るといへり。その工事の爲に使役せしもの、隱宮徒刑のもの、七十餘萬人。而かも、始皇の世を終つて、遂に成らず。その規模の大、想見するに堪へたり。漢の武帝、亦た大に宮觀を營み、建昌宮、通天臺、井幹樓、神明臺を作れりしが、その樓臺は、高さともに四十丈、上青雲を冒すといへり。殊に神明臺の上には、銅像の仙人あり。銅盤を捧げ、その大十圍、名づけて承露盤といふ。三國の時、魏の銅雀臺、許昌宮の如き、又宏麗なり。その他、陳の後主、隋の煬帝の如き、大に宮殿を壯にせしものにして、其技愈よ進み、之と相離るべからざる室内粧飾及び園藝の如きも、大に發達せしこと、疑を容れず。魏晉以後、寺を建て、塔を築くもの、頻々相續ぐ。こゝに於て、印度式は大に行はれ、やがて從來の支那式と融會し、一種の特色を發揮するに至れり。之を要するに、支那の建築

は、規模の大を主とし、技工の細に至りては、甚だ稱するに足らざるが如し。

その他、器物、織工の如き、漸を以てせる多少の進歩は、あれども、こゝに特記するに足る事實なきを以て、姑らく省略に従はむ。

第三百三十一章 社會事態の一斑

家族

漢族上古の家長制度は、自然の結果として、封建制度を馴致し、その破壊するや、秦漢以後の郡縣となりしが、社會の單位たる家族は、毫も古しへと異なることなく、家長は絶對の權力を有し、加ふるに男尊女卑の觀念、愈よ明晰となれり。一般の風習として、土着生活を爲したとひ、他郷に旅食すと雖も、決して、その故土を忘れず、死すれば、歸葬す。官に在るもの、數世郷を離れ、親ら其地を踏まざるも、郷貫を言ふときは、必ず祖先の地を稱す。かくの如くにして、家族は、同居するを常とし、必要上、或は家を分つことあるも、往々にして、一家數十百人に及ぶことあり。富家豪戶の如きは、奴婢を使役し、一家千餘人の奴婢を置くもの、少からず。武帝の時、沒收されたる奴婢の數は、千萬に上り、王莽の時、市中に奴婢の市を設け、牛馬と欄を同う

門閥を尚ぶの風

して賣買をなせしにより、法令を發して、之を禁ぜしも、人民その不便を言ふに由り、又その禁を解きたり、子女を以て質となすこと、貧民社會、常に之あり、名門右族、姬妾を蓄ふこと、數十百人、時に或は人に與ふ、這般の風、今日に至りて、猶ほ變ぜず、戰國の時、門閥を貴はず、布衣往々にして卿相に至る、漢に於て、なほ之あり、然れども、兩晋以後は、再び門閥を重んずるの風を生じ、仕官するに際し、貴きものは、高位を取り、貧なるものは、卑官を受く、且つ門地の高卑、截然として、相混ぜず、因つて、婚嫁を通ぜず、寒門の士、遂に世家の子と顔顔せざるに至れり、南北兩朝、亦た然り、後魏の李冲、この弊風を改めむと企てしが、行はれず、唐に至つて、尚ほ改めず。

服裝

衣服頭飾の如きは、又大に改善せられたり、袖は次第に窄く、裳はやゝ長きを加ふ、男子は髪を束ね、常に冠を戴き、科頭を以て人に對せず、通天冠、遠遊冠、高山冠、進賢冠等あり、又、巾には林宗巾の如きあり、女子は綾羅を以て、面を覆ひ、髪は必ず結ぶ、梁冀の妻は、墮馬髻をなし、魏の宮人は、驚鶴髻及び蟬冠をなせり、南北朝の時、北人は、蒙古、滿州等諸人種、混淆せし故に、その俗、頗る野なり、兩晋及び南北朝の蓬衣、寬

出入の儀

袖なるに反し、北朝は、窄袖、寬袴を用ふ、又南朝人士は、周秦以來の遺風によりて、頭髮を束結せしも、北朝後魏の人士は、その本土の遺風によりて、辮髪をなせり、これ索虜と稱せられし所以なり、孝文帝の時、その國風を改め、すべて南朝に倣ひ、後に隋唐統一、四海俗を同うすることゝなれり、秦漢以來、天子宰相の出づるや、大抵馬車を用ひ、南北朝に至りては、牛車、肩輿を用ふ、而して、北朝は、塞外の風を存し、馬に騎するもの多く、隋唐又之に仍り、百官天に朝する、又馬に乘じ、牛車は廢絶せり。

婚姻

婚姻の禮、大略三代と同じ、王侯は、甥、或は外家の諸姑を妻とし、更に行輩を論ぜず、同姓を忌むは、古しへより然りと雖も、歷世通家頗る多し、漢の惠帝の後、張氏は、帝の姉魯元公主の女にして、帝の甥なり、哀帝の皇后傅氏は、祖母傅氏の從弟の女なり、この類、極めて多く、姉妹ともに納れ、姑甥並せ聘する如き、亦た之あり、天子後宮の内寵は、古しへに比して、更に多きを加へ、禍源常に絶えず、民間之に倣ひ、往々にして古禮に違ふものあり、且つ長安閭里の民、嫁娶をなす前、財貨の多少を論じ、

聘禮の盛なるを減ふ。婚嫁又年を限らず。北朝の帝王及び王族の如きは、大抵十三四にして結婚したり。後魏の獻文、位を譲りしとき、歳十七、その子孝文、すてに五歳。北齊の王族高儼の殺されしとき、年十四なりしが、遺腹の子五人ありしといふ。ともに早婚の證となすべし。

喪禮

喪葬の禮上古に比して、やゝ簡。文帝短喪を遺詔し、漢末には三年の喪を改めて、三十六日となせり。時勢の必要、已むを得ざればならむ。棺槨は、木材或は瓦石を用ひ、王公の如きは、棺中の餘隙を埋塞するに雲母を以てす。又喪術といふことあり。五行讖緯の餘にして、一種の鬼道妖術なり。その主とするところは、土地の是非を相し、埋葬の吉凶を卜し、子孫後世の禍福を豫言するに在り。魏晉の間、この術大に世に行はれ、郭璞の如き、最も名あり。次いで、宋の孔恭高、靈文の徒、相墓を以て世に顯はれ、齊の唐寓之は、數世之を以て業となせり。今日支那内地に行はるゝ風水の術は、即ち其遺なり。

祭祀

祭祀は、秦の時、四時の祀を主とし、始皇は封禪を行へり。高祖の關中に入るや、更に一時を立て、北時といひ、關中五時あるに至れり。文帝之に郊見し、又五帝の廟

年中行事

と壇とを立つ。武帝、又五時に郊し、海内を巡りて、屢ば封禪の禮を修せり。その後、海内騷亂相踵ぎ、祭祀漸く希なりと雖も、天地を祭ることのみは、歷代之を守りて、今日なほ廢することなし。

隋唐以後、民間の風俗、頗る之を徵すべく、我が邦亦た多く之を傳ふ。元日、鶏鳴に爆竹をなし、惡鬼を辟け、而して後、長幼皆衣冠を整へ、家長に對して、新正を賀し、椒柏酒屠蘇酒及び桃湯を飲み、數子散、却鬼丸を服し、又鶏卵を食ふ。別に畫雞を戸上に帖し、葦菜を其上に懸け、桃符を其傍に挿みて、百鬼を畏らす。七日は人日と稱し、七種の菜を以て羹となし、之を食へば萬病なしといふ。又剪綵にて人を作り、屏風に貼し、或は頭髮に戴くが如きことあり。十五日は、上元といふ。豆糜を作り、油膏を其上に加へ、門戸を祠り、又其夕紫姑を迎へて、蠶桑を卜し、併せて衆事を占ふ。唐より後は、燈燭を列ねて、遊觀し、呼んで花燈の夕といふ。春分の日には、民家並に戒火草を屋上に植ゆ。立春の後、第五の戌の日は、社日にして、四鄰相集り、屋を樹下に造り、牲醪を設け、先づ神を祭りて、後に其胙を饗く。春事興るを祝するなり。寒食は、冬至を去る二月五日、國中火を禁じ、かつて作り置きし餠及び大麥の粥を食ふ。三月

三日、士民ともに江渚池沼の邊に出て、曲水流杯の飲をなす。五月五日、四民ともに百草を踏み、又百草を圃はす戯あり。艾を採つて人となし、門戸に懸けて、毒氣を攘ふ。夏至の日には、糶を食し、又菊を取りて灰となし、小麥の蠶を止む。六月、伏日、湯餅を食ふ。名づけて辟惡といふ。七月七日、牽牛織女の二星、銀河に相會する夜と稱し、婦女は綵縷を結び、七孔の鍼を穿ち、瓜果を庭中に陳して、巧を乞ふ。仍つて乞巧奠といふ。十五日は盂蘭盆にして、僧尼道俗を問はず、佛に供奉す。目蓮母を救ふの事に本づく。八月十四日には、人家朱水を以て、其兒の額に點し、天灸と稱して、疾を厭す。又飾綵を以て眼明囊を作り、互に相餉るの禮あり。九月九日、四民並に野外に出で、高に登つて宴飲す。九を陽數となし、日月並に應ずるを以て、重陽といひ、俗その名を嘉し、長久にして宜しからむを欲すればなり。十月朔日、黍臠を設く。十二月八日は、臘日と稱す。説者曰く、臘は合諸神を合せ祭るなりと。この日、村人細腰鼓を撃ち、胡頭を蒙り、金剛力士を造りて、疫を追ひ、又豚酒を設けて、竈神を祭る。除夕には香燭を具し、宿歲の方位に詣りて新年を迎へ、相集りて、酣飲し、鷄鳴爆竹をなす。一年の行事、略ぼ此の如く、今日概ね居然として行はれ、變ずるもの少しといふ。

▲東洋通史第八卷目次▼ (續刊豫告)

第三篇 蒙古優勢時代

(一) 北宋の世

- 第一章 太祖の治及び海内の平定
- 第二章 遼宋の和戰
- 第三章 西夏の叛服
- 第四章 太宗の繼述
- 第五章 澶淵の盟
- 第六章 仁宗の守文
- 第七章 慶曆の黨議
- 第八章 王安石の新政
- 第九章 神宗の對外攻戰
- 第一〇章 元祐の更化
- 第一一章 紹聖の紹述
- 第一二章 徽宗の荒政

- 第一三章 遼末の諸帝
- 第一四章 金遼の交替
- 第一五章 金兵の南寇

(二) 南宋の世

- 第一六章 高宗の南渡
- 第一七章 宋金の和戰 (上)
- 第一八章 宋金の和戰 (下)

(三) 蒙古族の盛衰

- 第一九章 成吉思汗の勃興
- 第二〇章 蒙古族の西征
- 第二一章 宋元の連合
- 第二二章 金の滅亡
- 第二三章 宋元の交戰(その他數章)

明治三十七年六月八日印刷
 明治三十七年六月十一日發行

隔月一回出版 全部二ヶ年ニテ完成ス
 全部十二冊 和本綴 總紙數三千六百頁
 定價一冊金五拾錢一六冊前金貳圓七拾錢
 全部三冊前金五圓一郵稅一冊八錢



著者 久保得二

發行者 大橋新太郎

印刷者 石川金太郎

印刷所 東京市京橋區西紺屋町廿六番地 株式會社 秀英



發元兌 東京日本橋區本町三丁目 博文館

文學士 史學專攻 坂本健一先生著

世界史

全二冊 洋裝大判背皮金字入美本
 總紙數二千五百餘頁

▲上卷正價金壹圓六拾錢小包送料拾五錢 下卷正價金貳圓小包送料貳拾錢
 ▲上卷概目 ▼ ▲下卷概目 ▼

第一 埃及昌隆の世	第三 羅馬帝國の盛世、安息王朝	第五 唐朝前後の東亞細亞	第三 佛蘭西隆昌の世
第二 亞述帝國の時代	第一 東亞細亞大陸の崩裂	第四 神聖羅馬帝皇の時世	第四 西力東漸時の亞細亞
第三 百兒士亞と希臘と	第二 薩贊朝と羅馬の季世及歐洲新民族	第一 宋、遼、金、夏の交	第一 佛蘭西革命歐羅巴の大亂
第四 阿歷山帝國及羅馬加達額の物興	第三 東羅馬帝國、東ゴト及薩贊王朝	第二 蒙古族の盛衰、土耳其族の西侵	第二 反動と動搖
第五 印度及支那の上世	第四 歐洲列強の興隆	第三 古族の西侵	第三 二月革命後の歐羅巴
第一 秦、漢の支那統一	第一 基督敎の改革、西班牙隆昌の時世	第五 歐洲列強の興隆	第四 亞細亞
第二 羅馬の隆運、西亞諸國の興亡	第二 明代の東南亞細亞	第六 牙隆昌の時世	第五 亞米利加の内訌、歐羅巴の新局
	索引	第六 明代の東南亞細亞	第六 最近事情

世界史上の幾江流は宛轉曲折に數千載晚近に至りて悉く會滙し怒濤狂瀾今や天下を捲く是れ豈古來未曾有の大史局にあらずや此時に當り天下の極東に國して新に振興の運に際會せる國民は東西古今の往史に鑑みて世界潮勢の來路を研めざるを得ず此書上下兩卷通して二千五百頁世界東西の隆否を通叙して餘蘊なし世の史學に想を傾るの士は邦文世界史中に其精細なる編著を求めば必ず先づ本書を採らざるべからざるなり

在大學院 文學士 淺井虎夫君著

支那法制史

洋裝 大判
正價 四拾錢
郵税 八錢

▲總クコース特製 正價五拾五錢 郵税拾錢

第一章 漢人種の建國
第二章 唐虞三代の法

第三章 漢代の法
第四章 唐代の法制

第五章 宋代の法制
第六章 明代の法制

附録 清朝の法典に就て

今や支那に對する各種の調査道々進捗するも、獨り法律の發達に關する研究に甚だ疎なり、蓋し本邦古代の法律は多く支那より出づるを以て、然も其關係如何を知らず遂に其母法を極めざる結果誤解を致して、是れ顧みざるものあり、是れ著者が可憐の傍ら之を論述せられたりして、是れ讀者之によりて彼我國民の特性を知り之を日本古代法制に比較し、更に歐州の法制に對比し其長短特質を究め得ば、以て他日有爲の活動に資する所大なるべし。

東亞同文學會幹事 恒屋盛服君著

朝鮮開化史

大判洋布美本
正價 壹圓
郵税 拾四錢

地理編

天然地理 ○平安道 ○咸鏡道 ○江原道 ○慶尙道 ○全羅道 ○忠清道 ○京畿道 ○黃海道 ○歷代版圖沿革 ○境外地域 ○日韓兩國地理上の關係

人種編

天降人種 ○扶餘族 ○半島關係の各種 ○漢族人種の殖民并に人種の大變動 ○日本人の殖民 ○扶餘族の半島大移住 ○百濟高句麗の亡滅と人種の移動 ○中古血脈の紛亂 ○概論

文化編

四南二系統の文明 ○魏晉文明の遷傳 ○佛敎傳來の結果 ○百濟高句麗文化の流傳 ○新羅王朝文運の盛時 ○高麗文明の第一期 ○高麗文明の第二期 ○李朝創製時代 ○世宗王の治世 ○世祖より宣祖に至る ○壬辰役後 ○社會 ○敎育 ○政府制度 ○運輸交通

外交編

半島外交の初期 ○新羅中興の外交 ○新羅外交の平和 ○高麗契丹の關係 ○高麗と宋金との關係 ○蒙古の征服時代 ○高麗末世の外交 ○朝鮮の圖書と其外交 ○日本の一大打撃 ○清國の征服 ○鎖國時代 ○開國後の外交 ○半島外交上の結論

法學士 須崎芳三郎君著

現代露西亞

洋裝 大判
正價 四拾錢
郵税 拾錢

▲總クコース特製 正價五拾五錢 郵税拾貳錢

緒論

第一章 表面的露國

第二章 露國の人種

第三章 露國の宗教

第四章 社會の組織

第五章 政治

第六章 革命の氣運

第七章 革命政黨

第八章 中央政界

第九章 國際に於ける露國

第十章 侵略の國是

第十一章 露國の外交

第十二章 露國の陸軍

第十三章 露國の海軍

第十四章 露國の海軍

第十五章 結論

露國の内情には驚絶に傾するもの多し、其事當に興味多きのみならず、我立國に關係する對露策に資する大なり、本書現時に於ける露西亞の真相を寫し、敵國の妍醜忽ち泰鏡に映せられ、魑魅走り魍魎懸るゝの怪觀を呈する是れ其特色なり、且露國の裏面が其政治、宗教、軍事、外交、財政等の諸方向に如何に編織的行動を爲しつゝあるか、野蠻的生活を爲しつゝあるかを、時局に注意する我國民は必ず精讀するを要す。

法學士 須崎芳三郎君著

露國侵略史

洋裝 大判
正價 四拾錢
郵税 八錢

▲總クコース特製 正價五拾五錢 郵税拾錢

緒言

第一章 露西亞小史

第二章 西比利亞の掠取

第三章 黑龍地方の横奪

第四章 中央亞細亞の掠取

第五章 波斯の侵略

第六章 土耳其の侵略

第七章 西比利亞鐵道

第八章 滿洲問題

第九章 結論

露國の過去三百年は侵略の歴史なり、西比利亞、中央亞細亞、高加索、波斯、巴爾幹等其方面極めて多し、一々其跡を尋ねて滿洲問題を馴致したる所以を示すは本書の目的なり、而して其の間に露人種虐の實例あり、外交不備の歴史あり、外交官の惡辣手段、邊疆武官の狡策、同族の毒計等露國の慣用手段は重出層見し讀者をして不知不識の間に自ら露國對滿洲國に用ゐたる奸險の外交を想起せしむる事は眞面目にして事實を記するに止め批評を讀者の意見に任せたり、則ち露國小史ありて露國建國の始より現帝ニコラス二世に至るまでの略史を載せたるを以て讀者は露國の歴史を知り得べし。

法學士 原田豊次郎君著

最近外交史

洋裝大判
正價四拾錢
郵税八錢

- ▲總クローヌ特製 正價五拾五錢 郵税拾錢
- 第一章 維納列國會議
- 第二章 神聖同盟
- 第三章 反動時代
- 第四章 希臘の獨立
- 第五章 クリミア戦争
- 第六章 伊太利統一
- 第七章 普佛戦争
- 第八章 普奧戦争
- 第九章 露土戦争
- 第十章 伯林列國會議
- 第十一章 三國同盟

附錄 巴奈馬獨立事情

著者曾て海外に遊びて列國の形勢を洞見し歸來外交時報記者として頗る外交の事情に精通す、本史は筆を維納列國會議に起して三國同盟三國同盟に至り、轉じて中央亞細亞問題西米戰後の合衆國獨乙殖民政策及び最新の歐洲國際政局を説き、更に再轉して絶東問題に及び今回の日露問題を以て結束し附録として(巴奈馬獨立事情)の一篇を添ふ用意懇到善く最近外交史の大勢を叙述して餘蘊なからしむ、蓋し刻下の必讀書なり

法學士 山本信博君著

政治地理學

洋裝大判
正價四拾錢
郵税八錢

- ▲總クローヌ特製 正價五拾五錢 郵税拾錢
- 緒言
- 第一章 國家
- 第二章 國家の種類
- 第三章 政體
- 第四章 君主
- 第五章 國務大臣
- 第六章 議會
- 第七章 司法
- 第八章 財政
- 第九章 軍備
- 第十章 教育
- 第十一章 人口
- 第十二章 屬地

法學博士 寺尾亨君校閱
法學士 永井亨君著

戰時國際法

洋裝大判
正價六拾錢
郵税拾錢

- 第一章 戦争
- 第二章 交戦國
- 第三章 同盟國
- 第四章 局外中立

本書の出色として特に擧ぐべきは言文一致體を以て戦時に於ける國家の種類として交戦國同盟國中立國の三章に分ち交戦國の章下には宣戰の布告を論じ戒嚴令を説き交戦地域と不可侵地とを述べて滿洲と蘇西の國際法上の性質を明にし商船捕獲を論じて津輕海峡に於ける露艦の擧動を批評し捕獲審檢所俘虜情報局を論明し赤十字の設備を詳説す同盟國の章下に日英同盟露國宣言日韓議定書を解明論究し中立國の章下には中立國の態度を明にして清韓二國地位を論じマンジュール號事件を説き日露兩國の戦時禁制品を比較評論し海上封鎖の法理を闡明したる

文學博士 男爵 加藤弘之君著

日露の運命

洋裝大判
正價拾貳錢
郵税四錢

優勝劣敗適者生存不適者死滅とは進化學の定理にして當に動植物界のみならず、天地間の森羅萬象皆此天則に支配せられざるはなし、今此理法に由り、今日の文明時代にありて、適者たる日本が益々隆盛に進み、不適者たる露國が次第に衰亡に赴かざるを得ざる所以を説けるもの章を別つ三、曰く『進化學の大意』曰く『人類世界に於ける生存競争自然淘汰』曰く『今日以後に於ける日露の運命』是なり

△東京經濟雜誌評

加藤老博士は平素深奥なる學理を講究せらるゝと同時に、重要な時事問題起るれば必ず之を論評せらるゝを常とす、本書亦其一にして、第一章は進化學の大意、第二章は人類世界に於ける生存競争自然淘汰、第三章は今日以後に於ける日露の運命を論じたり、博士が日露の政治、社會、軍事、外交上の優劣を比較し去り論評し來りて日本は必ず優勝するに反して露國の必ず劣敗するは、進化學上疑ふべからずとする所、評者の全然同意する點にして立論正確、亦何人も之を首肯せざるを得ざらむ、時局問題に着眼するものは一讀を要す

陸軍少將 福島安正君著

支那語 四聲聯珠

大判洋布美本
正價金貳圓
小包送拾五錢

本書は福島少將が英人威德氏著す所の語言自通集中の平仄編に基づき、章首に同時異聲一音殊聲のものを標出し、以て音聲の起原變化を別ち、又其字を文中に箱入し、以て其運用作用を示せしものにして、紙數八百三十頁、卷を分つ九、章を立つる無慮四百十六、卷末には註釋を附して以て難解の處なからしめ、彼國人情風俗より、軍國の重事に至るまで、網羅蒐討殆んど餘蘊なし、實に清國語學書中、空前の大著なり

前東京外國語學校教師 吳泰壽君著

日清往來尺牘

大判和本綴
正價三拾錢
郵稅六錢

支那の言語は南北同じからず朝鮮も亦た其國語あり然るに支那十八省及朝鮮を通じて一様なるは支那尺牘即ち往復文書なり本書は應川の文例を網羅して和譯を附したれば支那語朝鮮語を知らざる人も筆を以て自由に用務を辨し得べし軍隊に従事する人朝鮮支那に赴き事業を爲さんとする人は必ず一書を若ふべし

陸軍大尉 平山治久君著

滿韓土語案内

和珍洋布美本
正價貳拾五錢
郵稅貳錢

滿韓の土語は我外征軍隊に於て一日も缺くべからざる必要語なり此書前編は滿州土語後編は朝鮮土語の會話を收載し、主として滿韓兩地に於ける軍隊行動の便に資せんが爲、特に軍事的目的を以て編纂し、難語敬辭の如きは省略し極めて解し易きを旨とせり、殊に携帶に便する爲め四寸幅三寸の堅牢美觀なる袖珍本となしたれば軍人諸君は當に携帶せらるべきは勿論、將來我占領地に於て起原祖國の計ある志士必らず一書を備へ玉はんことを

露國神學士 西海枝靜君著

價露和會話

和珍洋布美本
正價五拾錢
郵稅四錢

日露の國交斷絶して極端相離突し俄大相拂ひ、此時に當り露語研究の必要なる甚に嘆々を發せず、然るに吾邦露語教科書は曠天の塵に均しく、例々二三の會話ありと杜撰にして實用に通せざる讀者の遺憾とする所なり、著者は夙に露語に精通するの人間、隨て本書は其正の正なるもの、先づ單語、いろは順、會話、露軍會話、會話文例、動詞變化法等の部門に別ち、更に露語を修むる者に取て無二の寶典たるものならず、平人商業家に必要なる英語、商業取引文章を網羅せり

